器用貧乏ですむのか？

人力車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
器用貧乏ですむのか？

【Ｎコード】
Ｎ５０８２Ｕ

【作者名】
人力車

【あらすじ】
なんでもソツなくこなす、所謂器用貧乏と呼ばれる少年がいた。その少年は面倒臭いことが嫌いだった。しかしある日、少年はＩＳを起動させてしまい日常が変わっていくこととなった。事実上「世界初のＩＳ男性装着者」、これは非常に面倒くさい。これはそんな面倒臭いことが嫌いな少年の日常？の物語。

プロローグ（前書き）

この話はＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞の二次創作小説です。
設定の独自解釈、変更、また原作キャラクターの正確変化もあります。
もしそれらが受け入れられない方は今すぐブラウザを戻ることをおすすめします。
大丈夫な方はこのまま本編、最初はプロローグですが、どうぞ！

プロローグ

どうしてこうなった？

あ、どうも初めまして、四季静和（しきしずか）です。

今俺の周りは異様な慌ただしさを発している。
それは何故か？

俺がＩＳを起動させちゃったからなんだ。
女性にしか扱えないはずのＩＳを、だよ。

今日はたまたま父さんが勤務する会社の研究所に見学に来ていて、
研究中のＩＳを触らせてもらったんだ。
そうしたら反応しちゃったわけですよ。

…はぁ…

どうしてこうなった？
俺、実は女っていうことはないよな？
いや、ないよね、だって小さい時からちゃんとついてるし。
まあいいや、とにかく父さんに聴いてみよう。

「父さん、俺どうすればいい？というか俺って男だよね？実は女で
小さいときに性転換したとかないよね！？」

「ちょっとそこで待ってろ。あと安心しろ、お前は私の自慢の息子だ！」

そう返答したのは見た目２０代にしか見えない俺の実父である四季（しき）学都（がくと）。

自他共に認める研究馬鹿の父親からの返答に俺は少し落ち着きを取り戻した。

でもなあ…はぁ…

「おそらくこれからしばらくは検査ばかりになるだろう。あとはトップがどう判断するかはまだ判らんが、まあ解剖されるわけではないから安心しろ」

そうはいうけど俺って世界初の男性ＩＳ装者になるんだろ？

それに解剖とか言われたら安心できるかよ！

ああ、どうしよう…

この先どうなるんだろう？

面倒なことにならなきゃいいけど。俺、面倒は嫌いだしなぁ、はぁ…

周りが慌ただしい中、俺は将来が不安になり人知れず溜め息を吐いた。

用語集　！ネタバレ注意！　（８月４日更新）（前書き）

所謂設定資料
一応本編でも紹介するので見なくとも本作は楽しめます。
最新話の段階までの用語集となりますので勿論ネタバレになります。
もしいやなら今すぐ引き返してー（・∀・）
オリキャラとオリＩＳはどうしようか検討中。
要望があれば載せるかも…

ちなみに一部ガンダムシリーズの設定や名前を使用してます。
これはイメージしやすいようにしたためです……作者がｗ

用語集　！ネタバレ注意！　（８月４日更新）

名前：アナハイム・エレクトロニクス社
種類：会社
詳細：
略称はＡＥ社。世界各地に研究所や会社を持つ多国籍企業。
アメリカにあるカリフォルニア州アナハイムとは一切関係がない。
スプーンなどの日用品から、スペースシャトルなどの関連部品、銃火器や戦闘機、軍用艦やなどの軍事関係のモノまで幅広く取り扱っ

ている。
また宇宙開発用にＭＳと呼ばれる人型機械を独自開発している。
日本とヨーロッパの小さな会社が合併して立ち上げた企業だったが、
いつしか世界規模の企業へと成長していった。
現在本社は大西洋にある海底資源を利用して建設された人工島「アース・コロニー」にある。
海洋汚染などの問題は解決しており、ＥＵ諸国からは自治区としても認められている。
総資産は日本の国家予算を軽く上回る程で、人工島に本社を構えてからは世間から「企業国家アナハイム」と呼ばれるようになった。
どの国家からも依頼は受け中立の立場をとっている。
中立が許される要因としては、保有戦力と技術、情報収集能力によるところが大きい。
能力と仕事さえしっかりしていれば、性別・人種・年齢などは関係なくそれ相応の地位や役職を得ることができる。
ＩＳコアは５個保有している。

＜コアの配分＞
本社防衛用：１
研究・開発用：２
代表者用：２

名前：アース・コロニー
種類：人工島
詳細：
ＡＥ本社がある人工島の名前。
人口は約３万人、島の面積は約５０平方キロメートル、海中部分を含めるとかなりの広さを持つ。
生産プラント・移住区・娯楽施設・教育施設・医療機関・防衛施設

を完備し小さな国のようになっている。

名前：ＭＳ（モビルスーツ）
種類：宇宙開発用作業用人型機械
詳細：
ＡＥ社が開発した「宇宙開発用作業用人型機械」の略称。
本来は宇宙空間や地上での作業が目的であったため人型に近く設計されている。
大きさは８～１０Ｍ級のものがほとんどだが２０Ｍを超える機体も存在する。
機体によって容量は異なるが、全てがバッテリー式で動いている。
宇宙限定での使用を目的とされた機体には、高性能太陽電池を搭載している。
ＡＥ本社以外の支社や製造プラントの防衛にＭＳが使用されている。
ＭＳに関しては販売を行なっているが重要部分はブラックボックス化されており、それこそ天災クラスでないと解読できない。

名前：ＧＢシリーズ
種類：ＩＳのシリーズ
詳細：
ＡＥ社が開発したＩＳのシリーズの１つ。
武装は「ＭＳ」に使用される技術を転用していることが多い。
ＧＢとは「Ｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ　Ｂｒｅａｋ（世代の破壊）」の略で、「特化能力で世代差を無にする機体」をコンセプトに掲げている。
それゆえＡＥ社の開発した第１世代ＧＢシリーズは今なお現役で、中には各国が開発している第３世代をも圧倒する性能を持つ機体もある。

コンセプトゆえ欠点は量産に向かない機体が多いことと、性能の一部を特化させたものが多く扱いが難しいという2点だろう。

名前：特殊収縮ケーブル
種類：部品
詳細：
通称ＭＣ（マッスルケーブル）と呼ばれる、人で言えば筋肉と神経のようなケーブル。
電気信号を受信し自在に収縮することが可能で、柔軟性が高く衝撃にも強い。
イメージインターフェイスとの相性が非常に良い。
基はＭＳの技術。

名前：三型機械骨格（さんがたきかいこっかく）
種類：部品
詳細：
一部の技術者から三骨（さんこつ）と呼ばれている。
人間の骨格をベースに、多種多様な動物を参考に可動範囲を重視し設計されている。
ＭＣ（マッスルケーブル）同様基はＭＳの技術。

名前：企業代表
種類：役職
詳細：
企業のＩＳ代表者のこと。
国のＩＳ代表者が国家代表ならば、企業のＩＳ代表者は企業代表ということ。
普通は企業から代表者が選ばれたとしても、企業が所属する国の代

表になるがＡＥ社のような例外も存在するため、それを区別するために作られた役職。
そのためこの役職を持つＩＳ操縦者は極めて少数である。

名前：短距離加速（ショート・ブースト）
種類：操作技術
詳細：
ＩＳの操作技術の一つで、静和が好んで使用する加速法。
名の通り移動距離は短いものの、燃費も良く小回りが効くのが特徴。
連続使用も可能だが、そのさいは操縦者と機体にかなりの不可がかかる。

1話（前書き）

今回からドンドンオリジナル設定や独自解釈、改変が出てきますのでご注意を。

1話

どうも、四季静和です。
さっき検査結果をきいて、今は会社の休憩所でマッ〇スコーヒーを飲んでいるところです。
さて、今の世界情勢をしるために少し昔話をしましょう。
昔俺が子供の頃、いや今でも子供なんだけど、「白騎士事件」という世界を騒がせた事件があった。

日本を攻撃可能な各国の軍事基地が同時にハッキング、その後総数２３４１発のミサイルが発射され、制御不能に陥った。
しかし日本にミサイルが届くことはなかった。

何故か？

それは後に白騎士、インフィニット・ストラトスー通称ＩＳーと呼ばれるマルチフォーム・スーツによって全て無効化されたからである。

その性能を危険視した各国は、白騎士に向け戦闘機２０７機、巡洋艦７隻、空母５隻を送り出し、情報を得るため８基の監視衛星を使用。

さらに当時まだ兵器としては研究段階だった、宇宙開発用作業用人型機械モビルスーツ通称ＭＳーを２機をも導入する事態となった。
が、それらは全て破壊された…一人の死者を出すことなく…

その結果ＩＳは「究極の機動兵器」として世界中の人々が知ることとなった。

そして白騎士の開発者、篠ノ之束の「ＩＳを倒せるのはＩＳだけである」という言葉とその現実を敗北者たる世界は受け入れることになった…

そう、受け入れたのだ……多国籍企業アナハイム・エレクトロニクス社――通称ＡＥ社――以外は……

――アナハイム・エレクトロニクス社――
数十年前、日本とヨーロッパの小さな会社が合併し誕生して以来、年々業績を延ばし続けた多国籍企業。
大西洋の海底資源を利用して建造された人工島、アース・コロニーに本社を構え世界各国に支社と研究所を保有する世界有数の大企業である。
その業務内容は、スプーンなどの日用品から、スペースシャトルなどの関連部品、銃火器や戦闘機、軍用艦やなどの軍事関係……さら

にＭＳの開発・研究である。
…そう、ＭＳの開発と研究、である。
実は白騎士に唯一傷を付けたのが、当時ＡＥ社から導入されたＭＳだったのだ。
その事実を知っていたＡＥ社だけはＩＳに対抗すべく兵器としてのＭＳ開発を進めていった。

白騎士事件からしばらくして篠ノ之束博士によって世界中にＩＳが発表され、４６７個のＩＳコアが各国・企業に割り振られた。
これにより各国はＩＳの研究・開発に取り掛かり、今まで活躍していた兵器は過去のものとなっていった。
しかしここでいくつか問題が発生した。

それは何か？

一つは何故か、ＩＳは女性しか起動できないということだ。
つまり今まで各国の軍で働いていた男性の多くは職を失い、また兵器関連企業も大打撃を被り失業者が一時的に増加した。
これにより世界経済は一時的に麻痺することとなった。

次にＩＳのコアだ。
現在ＩＳコアの総数は４６７個。
そしてそのコアの詳細な解析と複製は、製作者である篠ノ乃博士にしかできない。
そのため各国は篠ノ乃博士を引き入れようとするもそれは無理だっ

た。

何故か？理由は簡単だ。

篠ノ乃博士が行方をくらましたからだ。

どうやって世界の目を欺いているのかはわからない。

しかし現実として事件から数年した今でも見つからず、全世界で指名手配されている。

そして最後に、個人的にだが実はこれが一番問題な気がする。

それは女尊男卑の思想が世界中に広まったことだ。

何故か？ＩＳは女性しか扱えないからだ。

先に述べたとおりＩＳは現存する兵器の中で、究極の機動兵器として存在している。

つまり、もし仮にだが、世界が男女を二分し戦争が起こると男には勝ち目がないということだ。

白騎士一機であの成果だ、全ＩＳ４６７機起動すればそれこそ男の方は三日ともたないと言われている。

これにより、「女の方が男より強い」という思想浸透していった。

その結果が女尊男卑だ。

正直馬鹿げてると思う。

だってそうだろ？

結局「ＩＳを使える女性」が凄いわけであって、「ＩＳを使えない女性」は今までと変わらないんだから。

しかもＩＳを使えない女性ほど女尊男卑の思想が強い。

ほんと、どうにかならないかな？

さて、昔話や俺の考えなんかはこれぐらいにして現実に戻ろう。
俺がＩＳを起動させてから2週間がたった。
検査結果は、「極めて健康体」とのこと。

……まあ、あれだ、俺に異常は見当たらなかった。

んで次に会社、ＡＥ社の意向だが俺のことは秘匿にするらしい。
ちなみに俺がＩＳを起動できたことは、あの時現場にいた数名の研究員と会長、社長、副社長、社長ほ秘書さん以外はこのことを知らないらしい。
なんでも、無駄な火種を生まないため、だとか。
他には個人的な感情もあるんだと思う。
俺の父さんは会長と社長の二人と親交があり、その繋がりで俺も顔見知りだったりする。
小さいときはよく可愛がられたもんだ。

あとは、あれだ。
ＩＳの男性操縦者の実働データを独占するためだと思う。
実は某Ａ国を中心に無理やり決議された、アラスカ条約の条約上ＩＳの研究データは開示し共有しなければならない。
しかしここに落とし穴があったりする。
ＩＳのデータだけを開示すればいいだけで、ＩＳのパイロットのデータを開示しなくてもいいということだ。
厳密には装着者の名前は開示しなければいけないが、幸運にも俺の名前は静和（しずか）、ＳＨＩＺＵＫＡなのだ。
つまりローマ字表記もしくはヒラガナで表示すれば男と判らないのだ。

結果、俺は世界初のＩＳ男性操縦者という事実を知られないで過ごすことができる、たぶん。

まあＩＳに関わる上での弊害としてはアース・コロニーから気軽に出ることが出来なくなったことと、ＩＳに関わる時間が異常に増える、この２点が大きいかな。

趣味に割く時間が減ってドンドンストレスが溜まっていく気がする…

おぅ…誰か俺に癒やしを…

俺が今後を考え悩んでいると、仕事が一段落ついたのか父さんが休憩所に来た。

そして俺を見るなり…

「静和、お前のＩＳが完成したぞ」

……え？

1話（後書き）

やば、主人公喋ってねーw

2話（前書き）

新キャラ登場。
時期としては原作開始1年半ぐらい前。
そんなある日…

2話

どうも、静和です。
ＩＳを起動させてからもう半年が経ちました。
半年間何をしていたかだって？
そんなもん訓練やＩＳに関係する知識の勉強に費やしてましたよ。

そうそう、俺の処遇が正式に決定しました。
ＡＥ社所属のＩＳテストパイロットとして扱われるみたいです。
まあその中にはモルモットとしての意味合いもあるのだろうけど…

そんなわけで今日も朝からＩＳの訓練やらデータ取りやらをずっとやってました。
そんで今は１７時、とりあえず今日は終わりだけどこのあとレポートやら纏めないとダメなんだよな。
ああ、面倒くせー…こんなの１３歳のガキにやらせるなよな。

ん？学校はどうしたって？
そんなもん処遇が正式決まった段階で辞めましたとも。
まあ元々アース・コロニーに住んでたし学校に行ってたからそのへんはあまり気にはしてないけどね。
ただ友達と遊べなくなったのはキツイかな。

勉強面に関してだけど、一般教養は空き時間を利用してキャリーさんー社長の秘書さんーや研究所の人に教わってます。
あとは課題をやったりね。

そんなこんなで半年過ごしたわけさ。

「ああ～、怒涛の半年だったなぁ」

「あら、いきなりどうしたの？」

そんな俺の呟きに反応したのは俺の教育係であり、社長秘書をしているキャリーさんだった。
ちなみにキャリーさんは勉強面だけでなく、ＩＳ方面でも俺の面倒をみてくれている。
この人、器用貧乏な俺と違って本当の意味でなんでも出来ちゃう完璧超人だったりする。

「それでどうしたの？怒涛の半年、とかいってたけど」

そう言いながらタオルとスポーツドリンクを渡してくれる。
訓練後だからこの配慮は本当に助かります。
俺はそれを受け取り汗を拭きながら。

「言葉通りの意味。ＩＳの訓練と勉強、それに検査やデータとり。今関わることがない分野に頭を突っ込んでるからね」

「それもそうね、静和は半年前まで普通の学生だったものね」

「アース・コロニーでの、が付くけど」

そう、たしかに普通の学生だったがそれはあくまでもアース・コロニーでの、だ。
アース・コロニーにある学校は、世間一般で言うエリート学校と言っても差し支えないほどの学校だ。
小学校から大学まで一貫した学園タイプで、主に通っている学生はＡＥ社社員の子供が多い。
俺もその一人だったんだけどね～。

「非公式とはいえ世界初の男性ＩＳ装者。正直面倒臭い」

「気持ちはわかるけど、そんなことばかり言ってると女の子にモテないわよ？」

「いいんですよ。今好きな人はいないし」

「あらあら」

そう言いながら笑顔で俺に近づいてくるキャリーさん。

「どうしたの？顔が赤いわよ」

「ちょ、キャリーさん？ち、近いんですけど…」

ぜってーこの人楽しんでるよ！顔がニヤついてるし！
てか、色々当たってる！

主にその自己主張が激しい胸とか、あと胸とかさ！大事なことだから2回言ったよ！

「うう～～…」

「ふふ。照れちゃって可愛い」

「か、可愛いって。俺男なんだけど…」

「あら。そんな関係ないわ。可愛いものは可愛いんだから」

そういいながらやっと離れてくれた。
色々とやばい、主に俺の理性が。
大人の色気なんて高々１３歳のガキには刺激が強すぎるよ。
キャリーさんは俺が気持ちをなんとか落ち着けようとしている姿をみてクスクスと笑ってるし。
俺、この人の玩具にされてね？

「それじゃあからかうのはここまでにして「やっぱ、からかってたのか！」…当たり前じゃない。私の楽しみなんだから」

その言葉を聞き、俺は見事なｏｒｚの形を作り床に項垂れた。
判ってた、判ってたけどなんか悔しいよ。

「で、話を戻すけど、今日のレポートは明日の１７時までには完成

させて私に見せてね」

「明日の17時、までにですか」

「そ、一応基礎訓練はある程度完了したから、これからは武装テストとかに移ろうと思うの。そればかり、ってわけでもないけど割合としては多くなるかしらね」

「了解」

「面倒だとは思うけど頑張ってね」

「ま、その辺は割り切りますよ。面倒臭いけど」

そう言いながら肩を動かしわざとらしいリアクションをとる俺を見て苦笑したあと、キャリーさんは更衣室を後にした。

「さて、まずはシャワーでも浴びて着替えますかな」

◇◇◇

元々私は社長秘書として働いていた。
AE社の社長秘書、その肩書きは私の誇りでもあった。
でもそんなある日、私にとある辞令が下りた。

――四季静和の教育係に任命する――

内容は至極単純なものだった。もちろん理由も判っている。
でも私は少しばかり混乱した

――何故私が？

彼、四季静和は世界初の男性ＩＳ装者、イレギュラー、特異な存在だ。
これまでのＩＳの常識を打破できるかもしれない存在なのだ。
しかしそれを公表すれば、同時に彼を危険な目に合わすことになる。
そう考えた会長、社長、副社長、そして静和の父親であり我が社にとって重要人物でもある四季主任はこの情報を秘匿することにした。
でもいくら秘匿したところでどこから情報が漏れるか判らない。
そう判断した社長たちは、彼の教育係と同時に護衛として私を割り当てることにしたらしい。

自慢になるかもしれないが、私は所謂完璧超人と呼ばれる部類だ。
文武両道、容姿だってモデル顔負け、ＡＥ社社長秘書の中でも一番優秀と言われている。さらにＩＳも扱える。
加えて私と彼は顔見知りでもあった。
もちろんＡＥ本社、もう少し広くすればアース・コロニーにはそれぞれの分野事ならば私以上の人物は何人もいる。
でもそうすると先に言ったとおり情報が漏れやすくなってしまう。

だからこその私なのだ。
私としては、むしろ弟のように可愛がっている静和と一緒にいれるのだ。嫌な訳がない。
あ、そういえばもう一つ私が彼の教育係に選ばれた理由があった。

それは、彼、四季静和が「自他共に認める一流の器用貧乏」だからだ。

一流の、だ。
彼はどんなこともある程度学習すればすぐに身に付けてしまう。
もちろんシャンルによって習熟の差はあるが、運動も学問も、日常生活に関わることも。
ただしそれは身に付けれるだけであって極めれるわけではない。
そう例えるなら…

――格闘技で言えば、師範代クラスにはなれるが達人クラスにはなれない

――学問で言えば、学校の先生レベルにはなれるが各専門の教授レベルは無理

こんな感じだ。
十分才能の塊に思えるがが本人曰く、「極めれないなりのやった結果」らしい。
そんなことはないと思うのは、きっと私だけではないはず。

話を戻しましょう。
つまり、完璧超人と言われる私が器用貧乏の静和を教育するのに一番いいんじゃないか？という結論にいたったらしい。

そんなことがあったのが半年前、それから彼にＩＳについて色々教えているけど、正直驚かされた。
だってその器用貧乏がＩＳでも発揮されているから。
たぶんだけど一般のＩＳ装者よりも習熟は早いはず。
もちろん、発覚してから半年間検査が多かったとはいえ、ほぼ毎日朝からＩＳを扱っているからというのもあるだろう。
だとしてもすごい。
もしかしたらだけど、この辺は男女の差があるのかもしれない。
それとも彼自身の才能か…

「ふふ、静和。将来あなたの存在が、今の世界にどんな影響をあたえるのかしらね」

社長と四季主任へ報告へいく途中に呟いた言葉は誰にも聞こえることなく静寂へと消えていった。

2話（後書き）

…主人公のＩＳ、未だ登場せず！
ちなみに次回はオヤジたちの会談を予定してます。

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

3話（前書き）

オヤジたちの会話。
やや、というかかなりグダグダしてます。

3話

時は静和が初めてＩＳを起動してから一年。場所は社長室。
社長用の机、その前に設置された長机、それを挟むように置かれた４つのソファーとそこに座る人影。

今現在この場には、ＡＥ社にとって重要とされる人物が四人存在している。
その四人は皆、長机の上に並べられたとある人物について纏められた資料を見ながらその人物に付いて考えていた。
しばらくし、全員が資料に目を通し終えた時だった。

「順調なようで何よりだ」

低い、そして威厳ある声の主、ＡＥ社を立ち上げた一人にして現会長、械羽弦司郎（かいばげんじろう）は言葉を発した。

「ええ、しかし残念なのは今だ彼が何故ＩＳを扱えるかが解らないところか…」

弦司郎と共にＡＥ社を立ち上げた現社長、アントニオ・ファリーニははそれに同意しつつも複雑な表情をしていた。
彼とは勿論、四季静和のことである。
彼はこの一年間ＩＳに関する訓練と勉強だけでなく、何故男である

彼がＩＳを扱えるのか？ということを解明するため様々な検査をしてきた。
検査内容はあくまで彼に同意した上で行われ、非人道的なことは一切されていない。
多少薬物投与などの実験的検査もあったが、それも一般の薬品を作る過程の臨床実験と大差ない内容だった。

「でも静和はよくやっていると思いますよ。今ではＩＳのテストパイロットとして、うちでは必要不可欠な人物です」

会長である弦司郎の息子にして実力で今の地位まで上り詰めた男、械羽綾鷹（かいばあやたか）は静和の必要性を主張した。

「それはもちろん解っている。シズカがＩＳを動かせることを知っている人物は皆彼の努力やその貢献度を理解している」

「なら…」

「それでも！…それでもやはり心のどこかでは残念だと思ってしまうものだ。そうだろ？アヤタカ副社長」

「……それは……」

「アントニオ、そう言ってやるな。綾鷹もだ。こればかりはしょうがないだろう、なんせ坊やは全世界の男、特に軍人にとっては希望の塊のような存在なのだぞ」

そう、静和という人物は男の希望なのだ。
それも空を飛ぶことを、守ることを、戦うことを奪われた男性軍人にとってはよりその意味は強い。
アントニオは専属秘書であり、現在は静和の教育係でもあるキャリーから報告は受けている。
故に今回の資料内容に関しては資料に掲載されている以上のことも少なからず知っている。
しかし、それは程度の差はあれ他の二人も知っていることだ。

「……四季よ。専属技師、そして実の親としてはどう考えている？」

弦司郎の言葉により、二人は資料を読み始めてから今まで一言も発していない視線を向けた。
そう、この部屋にいる最後の重要人物。渦中の人物である静和。
その実父にして専属技師たる四季学都は口を開いた。

「…私としては、よくやっている。という気持ちと同時に、すまなかった。そう思っています」

それは専属技師としての様々な意味をもった賛辞と、父親として様々な意味をもった後悔だった。

「ほう…」

弦司郎は別段驚くことはなかった。
しかしその言葉の意味、続きが気になった。

「私は専属技師として、この一年間で息子から得られた様々なデータは我が社のＩＳ開発、そしてＭＳ開発には欠かせないものでした。もちろん何故扱えるかが解らなかったの研究者としては悔しくもあります。
　それでも利益が多過ぎたので今後の課題として受け止めています。しかし父親としては違う」

そう……父親としては違う……

発覚当初、学都は大いに喜んだ。実の息子が女性にしか扱えないＩＳを起動させたのだ。

――自分の子供が特別な存在、他者よりも優れている。――

これを喜ばない親はいるだろうか？いや、居ない。おそらくいたとしてもごく少数だろう。
このとき学都に喜びと同時に、研究者としての本能に火がついた。
そしてこのあとの行動が後に彼を、今現在も抱える後悔へと繋がるのだった。

「私は息子に、ＩＳに携わる時間をより多くの取らせるために学校を辞めさせた。いや、これには息子も同意していたので正確にいえば自分で辞めたといってもいいでしょ」

学都のいう通り、静和は学校を辞めることについて反対はしていなかった。
むしろ即決だった。

――面倒くさそうだけど、でもこれって俺しか出来ないことだよな。しょうがないよね

これは静和が学校を辞め、正式にテストパイロットに決まったときに呟いた言葉だ。

「これを聴いたとき、私は後悔しました。この時の息子の顔は今でも覚えています。色々なことを諦めた表情でした。そんな表情を１２歳の子供に、たった１２歳の子供にさせたんだ。それも実の息子に…。後悔しない訳がない」

「それについてはわしらも申し訳ないと思うとる。坊やには色々と背負わせてしまったからな」

「…特別な存在、それ故の弊害、ですか…」

――特別な存在――

それは他とは違うということ…

それは希少だということ…

それは理解が難し、もしくはできないということ…

……つまり…それは「孤立」なのだ……

そして希少ということは様々な思惑から狙われることでもある。
それを防ぐため、当時立ち会った人物全てに厳命を下した。
また情報漏洩を防ぐため様々な対応を行なった。

その結果、静和は多くの友人を失った。
一時期静和荒れていた。
元々面倒が嫌いな性格だ、今回のことは彼自身わかっていたがそれでも予想以上だったのだろう。
しかもまだ精神が未熟な時期に予想以上のストレスである。

「ええ、親としてはもっと早くこれに気づくべきだったと思います。情けない話ですが、私ではどうすることもできませんでした。だからこそ、彼女には感謝していますよ」

そしてそれはある人物によって緩和されることとなった。

―キャリー・ミリオン

彼女は、現社長アントニオの秘書の一人にして最も優秀、そして完璧超人と呼ばれる存在だ。
元々キャリーと静和は親交があり、お互いに年の離れた姉弟のように接していた。
教育係に任命されたのがキャリーであったこともあり、徐々にだが静和の精神的負担は緩和されていった。
これはキャリーがいたからというのもあるが、静和のことをよく理解し彼自身にストレスを発散させていたことが大きい。
まあ他にも色々あったようだがここは割合しよう…

「…後悔はあります。それでも…私はこの場で専属技師としての考えのみを優先したいと思います」

「ほう、それはなぜだ？」

「当初は色々ありました。しかし、今では息子もそれなりに楽しんでＩＳに関わっています」

そう、静和は口では「面倒臭い」といいつつそれなりに楽しんでいるのだ。

それに初めに気づいたのがキャリーなので、親としては複雑らしいが。
楽しんでいるなら今は現状に甘えさせてもらおう。
でも、必ず原因を解明し息子にある程度の自由を得てもらう。
学都そう考えていた。

そして話は変わり、その内容は静和のＩＳ、専用機へと移った。

3話（後書き）

次回、静和のＩＳを紹介。
むしろそれだけになるかも？

感想・誤字脱字報告お待ちしております。

4話（前書き）

今回は主人公のＩＳについての話。ただそれだけです。
設定をただ文章にしただけのような気がしなくもない・・・（・∀・；）
独自解釈や設定もありま～す。

4話

―ＡＥ社製第２世代型武装実験用ＩＳ　ＧＢ－ＡＥＸ－１７、通称エイクス

これが静和に与えられたＩＳの名であり外部書類上の表記である。
正確には「ＡＥ社製第２世代型特例状況観測ＭＳ技術転用試験型武装実験用ＩＳ」となる。

別名最弱のＩＳと呼ばれる、データ収集用の実験型。
静和が搭乗することで初の男性での稼働データをとるため、当初は安定感のある第２世代型をベースとしたカスタム機を予定していた。
が、気づけばＩＳ開発陣―主に父親の学都―によって、構想段階だった観測特化型のＩＳとＭＳの技術を融合した結果がこの機体だ。

アラスカ条約により各国や企業のＩＳの開発データは開示されている。
勿論ＡＥ社とて例外ではない。
そのためエイクスもスペックデータを開示しているのだが、そのデータをみた誰もが思った。

――あのＡＥ社が何故こんなＩＳを作ったのだ？

元々ＡＥ社の作るＩＳ、そのなかでもＧＢシリーズと呼ばれるＩＳは機能特化型が多く、扱いが難しいピーキーな機体が多い。

ゆえにそれを知る者の多くは型番を見た段階で、エイクスも何かしら特化した機体だと思った。

しかしその特化した部分が予想外だった。

…そう…予想外…つまりこのエイクスというＩＳもある意味異端なのだ…

それはスペックデータに現れている。
ＩＳの性能を見る上で比較されやすい６つの項目。

・攻撃能力
・防御能力
・機動性
・操作性
・索敵、観測能力
・拡張領域

これらをエイクスに当てはめると以下の通りとなる。

まず攻撃力というか能力。

基本武装がないため殴る蹴るなどしか主な攻撃手段がない。
後付武装（イコライザ）により多少変化するが、何もしなければ全ＩＳ中最低といえる。

次に防御能力。
エイクスはその見た目からして他ＩＳと違う。
まずＩＳとしては全体的に線が細いのだ。
理由は腕や脚に特殊収縮ケーブル―通称マッスルケーブル―を使用し、小回りや軽量化、さらには柔軟性を得るため。
そのため四肢の装甲は少なく、その装甲には複合装甲を使用し最低限の防御力を確保している。
腕や脚の関節周りの装甲はさらに削られ、繊細かつ柔軟な動きを可能とするために使用されているマッスルケーブルと可動範囲を重視して設計された三型機械骨格に干渉させないためである。
胸部や腰には装着者を覆う形で装甲があるが、これは肩や脚、腰の動きに干渉しないよう最低限あるだけ。
マッスルケーブルのおかげで各機械関節の強度は他ＩＳよりは強くなっている。

ちなみに三型機械骨格とマッスルケーブルの製造法は開示されておらず、現在はアース・コロニー防衛用のＭＳとエイクスにのみ使用されている。

３つ目、機動性。
数値上、フランス製ラファール・リヴァイブや日本製打鉄よりは若干上という程度。
ただ軽量小型化されたブースターとスラスターを搭載した背部ユニ

ット、そして脚部に設置されたブースターにより実際の数値よりも高速で動ける。

４つ目、操作性。
マッスルケーブルと三型機械骨格により機体の柔軟性と反応速度は第２世代型をゆうに超えている。
そのため設定をちゃんと行なっていないとＩＳが過剰反応をしてしまう。
設定さえしっかりすればかなり良いといえる。

５つ目は索敵、観測能力。
これは元となった観測特化型の思想を受け継いでいるがそれは後付武装に成り代わっていおり、素の状態だと第２世代型の標準値。
ＩＳのハイパーセンサー、複合機能を持った頭部パーツ、さらに後付武装による各種センサーを連動させることでその索敵、観測能力は飛躍的に上昇する。
結局のところ本体性能ではなく、後付武装との連動に頼る形となるためそこまで凄いものでもない。

最後に拡張領域（バススロット）。
現在のどのＩＳよりも多いとされており、ラファール・リヴァイブの約１０倍。
これはエイクスが武装実験型としての側面を持つためである。
しかしこの大容量拡張領域を得る代わりに基本装備が失くなってい

るので微妙と言えば微妙である。

つまりエイクスは…

――大容量拡張領域を得るために機動性と操作性以外を排除したＩＳ――

そう認識されてもおかしくないのだ。

拡張領域が多いということは、考え方を変えれば汎用性が高いといえる。

しかし、それならばラファール・リヴァイブほどの容量で十分であるし、ＡＥ社は既にストライクと呼ばれる汎用型を開発・販売も行なっている。

だからこそ、余計に、何故このＩＳを作ったのか理解できないのだ。

そして情報公開以降エイクスこう呼ばれた。

…ＡＥ社の欠陥機……と……

そして各国、各企業はこの機体の初期開示データを観覧して以降、興味もしくは利益がないと判断し必要のないＩＳと認識していくこととなった。

しかしこの機体が後にＩＳ学園にて様々な結果を残す。

そう、一流の器用貧乏、第２の男と呼ばれる専用搭乗者、四季静和によって。

……それを世界がしるのはまだ先の話……

4話（後書き）

以上。会話の一切ない４話でした。
次回では少し話に動きがあるかも？

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

5話（前書き）

相変わらず独自解釈や設定が出てきます。
多分今後矛盾が発生するかもしれませんがその時は・・・修正だ！
（・∀・）

5話

どうも、俺こと四季静和です。

今世界はとある少年の話題で持ちきりだ。

――織斑一夏（おりむらいちか）

それが件の少年の名だ。
内容はとても簡単なモノ。

織斑一夏は男でありながらＩＳを起動させた。
そしてそれは世界へと瞬く間に広がった。
理由は簡単だ。
男がＩＳを起動させたのだから。

それを俺が言うのもおかしいが、ＩＳは本来女性しか動かせないのだからその重要性、異常性は計り知れない。

今もテレビのニュースや新聞では彼のことを取り上げている。

『世界初、ＩＳを起動させた男　織斑一夏にせまる』
『織斑一夏は何故ＩＳを起動できたのか？』

『織斑一夏の重要性と価値』

だいたいこんな感じの内容だ。

んでだ、今現在俺はＡＥ社社長室にいる。
それも会長、社長、副社長、父さん、キャリーさんの５人もだ。
なんでこの面子が集まっているかというととても簡単だ。

俺…四季静和の今後の処遇をどうするか…というものだ。

おそらく織斑一夏はＩＳ学園に強制的に入学させられるだろう。
世界的には男で初めてＩＳを起動させたのだ、他の普通の学校に行くことなんて出来る訳がない。
そして彼の存在は俺と同じ、色々な組織、企業、国家からどんなことをしてでも手に入れたいサンプルなのだ。
もちろんそんなことをすれば世界を敵に回すことになるので公に行動を起こすことはないだろう。

まあＩＳ学園へ入学させることはある意味で安全であり、彼の自由を縛ることを最小限に抑える行為。
もちろん万全ではないが少なくともそつぎょうまでの３年間はどの国や企業よりも安全だろう。
そしてＩＳ稼働データを得るためにはもってこいの場所だ。
それゆえにＩＳ学園への入学はほぼ１００％確定だろうな。

んで話を戻そう。今後の俺の処遇だ。

「しかし、世界初、いや実際は二人目だが、男の操縦者が見つかるとはのう」

「それについては世界中が驚いたでしょうね。シズカの存在をしっている私たちでも驚いたんだ。一般的に世界初の男の存在に驚かない訳がない」

「…それで、弦司郎さん。俺はどうすればいいでしょう」

あ、俺が何故会長である弦司郎さんを名前で呼んでるかだけど、実は会長、社長、副社長の3人とはＩＳを起動させる前から面識がるんだ。
父さんの経由で知り合ったんだけど、それ以来孫みたいに可愛がってもらってる。
ＩＳ起動後は数少ない俺の事情を知る人達だし、報告なんかのために前以上に合うようになった。

話が脱線しそうなので戻そう。
とにかく俺はどうすればいいんだろう？
いくつか案はあるけど…

「静和君、いくつか案があるがその中なら選ぶ、もしくは別案を考えることになると思う」

「内容は？」

「それはだね…」

1．今まで通り過ごす。
メリットは安全性、デメリットは生活の自由度が極端に低いこと。

2．世界に公表せずＩＳ学園に入学する。
メリットはＩＳと織斑一夏のデータを得られることと、自由度が今までよりも上がること。
デメリットは安全性の極端な低下。

3．世界に公表した上でＩＳ学園に入学する。
メリットは2と同じ、あとはＡＥ社の名がまた世界的に有名になること。
デメリットは2ほどではないにしろ安全性が今までよりも低下すること。

4．公表後様々な研究機関を利用しなぜ扱えるかを解明する。
メリットは何故男でもＩＳが起動できたのかが解明できる可能性があること。

デメリットは静和の身の安全。
おそらく安全性の低い実験や薬物投与などが行われ、最悪死んでしまう可能性があること。

「今のところ纏まっているのはこれぐらいだな。まあ４案は却下の方向で考えとるがな」

含みのなる笑みを浮かべながらそういい弦司郎さん。
却下の方向ならなんでこの場でいうのさ…
１は変化がないからやっぱ２と３のどっちかだよなあ。

「２と３は簡単にいえば自由を得るための代償をどれだけ払うか、だね」

「…代償ですか…メンドくさ…」

溜め息を吐きながらつぶやく俺をみたキャリーさんに小さく笑われた。
だってしょうがないでしょうに。
面倒は嫌いなんだから、なるべく関わりたくないだよ。

「２の公表せず入学すればシズカの自由度は今までよりも上がるけど安全性は格段に落ちる。
これは世界がシズカの重要性に気づくのが遅れるからというのと、

気付いた国や企業に対しての牽制が少ないということだ。
もちろん護衛というか監視はある程度つけるけどそれでも限界がある。」

「監視はわかるけど護衛って？」

「これは日本の知人に話を通そうを思っている。ちょっときな臭いところもあるが日本や知人に害を与えなければ何も悪いことはしてこないさ」

「父さんの知人、ねえ…」

「なんだ不安なのか？」

そんなことを聞いてくる父さん俺は

「もちろん」

と即答しておいた。
だって、研究バカの父さんの知人だよ？
会いもせず安心できるわけないでしょうが。

んでなんかショックを受けている父さんを置いて話は進んでいく。

「3の場合だと2よりも自由度は下がると思う、ただ世界中が知ることでシズカの重要性をしりどうしても引き込めない画策するだろ

うけど結局お互いを牽制し合う、ようはお互い足を引っ張り合ってもらう、そういうことだ。
もし何かあったときは抜け駆けした存在を許さないだろうから協力も申請しやすい。
正直何かあったとしてＩＳ学園や日本政府だけで対処出来るとも思えないからな。
そのためにシキ博士の知人を頼る、これは２と３に共通することだ」

「…俺としてはその何が、が起きないことを祈ります。面倒は嫌いですから」

「そうだったな。それでだ。シズカ、君はどの案にしたい？それとも別の案があればそれも検討するが」

「え？こういうのって普通上が決めることじゃないんですか？」

「普通は、ね。だけど静和。あなたは普通ではなく例外なのよ」

たしかにキャリーさんのいう通り俺は普通の状況にはいない。
けど、それでも俺は一介のテストパイロットだよ？
弦司郎さん達と面識はあるけどそれはこの場では関係ないし。
俺がどうすればいいか悩んでいると。

「何か悩んでいるようだが、坊主。お前の好きにしたらいい」

「え！？で、でもそれだと弦司郎さん達やＡＥ社迷惑かかるし…」

「そんなこたー気にせんでいい。坊主はまだ子供だ。子供がそんな

ことぁ気にせんでいい」

「そうだよ静和君。それに君はもうＡＥ社に対して色々なことをしてくれたじゃないか」

「その恩返しの意味も含め、今回はシズカの決定に賛成しよう。実は私達３人の意見はもう決まっているのですよ」

う、そんなこと言われても…

「ふむ、まだ決められないみたいだ。では息子よ。こういうのはどうだ？」

「何？」

すると父さんはいい笑顔、いやこの場合は悪い笑顔といえばいいんだろうか、とにかくそんな顔をして。

「今からテストパイロット四季静和に辞令をだす。内容は簡単なものだ。今回の件、自分の好きなように決めろ」

以上だ。そんなことを言って俺に辞令をだしやがった。
しかも事例とか言いつつさっきのことと内容変わってないし。
…まああれだよね。仮にも俺はＡＥ社所属のテストパイロット。
そのテストパイロットがよっぽどのことがない限り上の命令に逆ら

えるわけないでしょうが。

してやったり顔の父さんの顔がむかつく…

まあいい、あとでぜってー殴る。

それよりもどうするか、だよな。

本音をいえばアースコロニーの外に出てみたい。

ＩＳを起動させてから今まで全く出たことがないわけじゃない。

でも行動制限だったりすぐ近くに護衛の人がいたりしてあまりゆっくりすることもできなかった。

俺の唯一の趣味って言ってもいい絵だって全然描けなかった。

ん～やっぱ外に出たい。でも確実に面倒なことが起きるだろうな…

◇◇◇

静和が考え始めて5分ぐらいたった頃だろうか、彼は顔をあげた。

その瞳には「決めた」、そう強い意思がこもっていた。

「決めました。俺、ＩＳ学園に入学します」

「で、2と3どちらでいく？」

「3でお願いします。自由と安全の両方をとるなら多分3の方がいいと思うので」

「そうか」

弦司郎はどこか嬉しそうは顔をして頷いた。
弦司郎だけではない。他の４人もだ。

「ではこれから色々手続きが大変になるだろうが、それは我慢してくれよ」

「……具体的にいうとどれくらい？」

手続きが大変。これを聞いた静和はピタリと止まった。
それもそうだ。
本来静和は面倒事が嫌いなのだ。
そのため「色々面倒」これは彼にとってはとてもいやなことだったりする。

「そうだな…」

学都の言ったことを纏めると以下の通りになる。

・日本の知人へ連絡をとり、護衛を頼む
・全世界に静和の存在を発表
・ＩＳ学園に静和を入学させること伝える
・静和及びエイクスのデータを学園へ送る
・学園の入学試験を受ける

ちなみに護衛の件は了解をとることができた。
もちろんタダではなく、ＡＥ社日本支部からその知人もしくは日本となんらかの取引を行うらしい。
顔合わせの為一度日本へ渡ることとなる。

このときある少女と出会うことになるのだがそれはまた別の話。

一度ＡＥ社へ帰りその世界へ向けて発表。
アース・コロニー内部での取材は制限があり、特別に設けられた海上施設にて記者会見が行われた。

『まさかの二人目！？』

『ＡＥ社が発見した二人目の男性ＩＳ操縦者！！』

『二人目の男性ＩＳ操縦者、その正体とは！？』

その後静和は日本へ渡り、学園の入試―特別な内容だったことが後日判明―やデータの受け渡しを手渡しで行なった。

――月日は流れ４月――

二人の例外は学園に何をもたらすのか？

世界は二人をどう扱うのか？

……それを知る者はまだいない……

5話（後書き）

ところでＩＳ学園の試験っていつやってるんでしょうね？
わかんないから特別試験的な感じで書いちゃいましたが問題ないよね？

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

6話（前書き）

今回より原作に突入。
原作とあまり変わらないけどこれから徐々に変わっていく予定です。
ま、大筋は変わらないと思うけど（・∀・）

6話

想像以上にキツイ。出来るなら帰りたい。

俺、織斑一夏(おりむらいちか)がそんなことを思っていると教室のドアが相手先生と思しき人が入ってきた。

「皆さん初めまして。これからＳＨＲをはじめますよー。」

目の前の教卓にいるのは身長が低めで童顔、パッと見生徒と間違ってもおかしくない人物だった。

「初めに自己紹介をします。私は１年１組の副担任をすることになった山田真耶(やまだまや)です」

目の前の女性、山田先生を見るとその見た目から本当に先生かと思えてくる。

ややサイズの合っていないだぼっとした服。

かけている黒縁眼鏡は大きく合っていないのか若干ずり落ちている。

う～ん、なんというか「子供が無理して大人の服を着ました」そんな不自然さを感じるのは俺だけだろうか？

俺がそんなことを考えているなか山田先生の話は続く。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いします」

「……」

しかし変な緊張感が漂う教室から返ってきたのは無常にも静寂だった。

「あ、あの、それじゃあ自己紹介をお願いします！えっと、出席番号順で…」

反応が一切ないためうろたえる先生。
誰でもいいから反応してあげようよ。
え？俺がすればいいって？
そんな余裕、今の俺にはない！
理由は簡単だ。
俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

しかも何故か席の場所が在前列の中央、つまり一番前一番視線が集中するところなのだ。
さっき窓側にいる幼馴染である篠ノ之箒に目線を向けたけど、目をそらされ無視された。
…それが6年ぶりに再開した幼馴染に対する反応かよ！
俺、嫌われるようなことしたかな？

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はい！？」

いきなり大声で呼ばれて思わず声が裏返って反応してしまった。
周りはクスクスと笑っている。
うわ～恥ずかしい…

「あっ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな？ゴメン、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介してくれるかな？『あ』から始まって今『お』で織斑くんの番なんだ。自己紹介、だ、ダメかな？」

気が付けば山田先生がペコペコ頭を下げていた。
う～ん、この人本当に歳上なんだろうか？
同い年って言われても受け入れられるぞ。

「あ、あの、先生そんなに謝らないでください。自己紹介はしますから、先生落ち着いて」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

ずいっと身を乗り出してきた先生の視線を受け、しっかりとたった後俺は後ろに振り返る。

（うわ……）

今まで背中で感じていた視線を正面から受け止めたがこれはキツすぎる！
正直何を言っていいものか、下手なことは言えないし…

「えー…えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

そういって無難というか簡潔に自己紹介をしたあと儀礼的に頭を下げて上げた。
でもそんな俺を待っていたのは、『もっと色々喋ってよ』、『これで終わりじゃないよね？』という皆の視線と空気。

（色々ってなんだよ！？何喋っていいかわかんねーよ！）

ダラダラと背中を流れる汗を感じながらどうしたものかと考えていた。
このままだと「暗いやつ」というレッテルを貼られかねない。
それだけは断固阻止しないと。
俺は呼吸を一度止める。
そんな俺に周りの女子は息を飲む。
そして俺は再度息を吸い、思い切って口にした。

「以上です」

ガタガタ。

俺のその一言で教室にいるほとんどの女子がずっこけた。
その様子にコントみたいだな、と思っていると…

パアンッ！

いきなり頭を叩かれた。

「いっーー！？」

「ったく、自己紹介もろくにできんのか」

あまりの痛みと聞いたことのある声に俺はおそるおそる振り向いた。
その先には黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられたボディライン。組んだ腕に狼を思わせる鋭い吊り目。

「ち、千冬姉(ちふゆねえ)っ！？」

スパアンッ！

「すこし黙っていろ」

ちょ、そんな叩かないでほしい。
出席簿から出るには大きい音に女子が若干名引いてる。
てかなんで千冬姉がここにいるんだ？

職業不詳で家に帰ってくるのが月に一、二回あるぐらいの俺の実姉は。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと…」

さっきの涙声はどこへやら、副担任の山田先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の千冬姉へと応えている。

「まずは、諸事情で少し遅れたがこのクラス最後の生徒入ってきてもらおう。四季、入れ」

千冬姉がそういうと教室のドアが開いた。
そしてそこから入ってきた人物に教室がざわめいた。

だってそうだろ？

そいつは「男」だったんだから……

◇◇◇

「織斑先生、すいませんでした。まさかこっちの不手際で書類ミスがあるなんって」

「いや、それはこちらのミスでもある。気にすることはない」

どうも、俺こと四季静和は今、担任である織斑千冬さんと一緒に教室へと向かっている。
なんでこうなったか？
まあ簡単にいえばちょっとした書類ミスがあったんだよ。
普通の学生、まあ女生徒達だと十分なんだけど何分俺は男だからね。
例外、特例、異常…そんなわけで俺は普通よりも書かなければいけない書類が多かった。
それに早めに気付いたのはよかったけど、結局入学式には参加できずそのまま教室へ向かうこととなったわけだ。

「そういっていただけるなら」

「先に言っておく。君が所属する1年1組にもう一人の男である織斑一夏がいる」

「ああ、あの公式で世界初の」

そういう俺を織斑先生は鼻で笑い。

「歴史上世界初が何をいう。書類通りならお前が世界初なのだろう」

「…そうですね…」

確かにそう、公式上は織斑一夏が初だが、歴史上で見れば俺が世界初だ。
ちなみに何故織斑先生がしっているかというと、提出した書類やデータのなかにそのことが入っているからだ。
このことを知っているのは学園内でも少ないらしい。
というかＡＥ社がＩＳ学園に何かしらの圧力、もしくは取引をしたんだと思う。

そういえば護衛の話だけど、とりあえず顔合わせは終わっている。
四人の、二人は年上で二人は同い年の少女と話をした。
四人ともＩＳ学園の生徒らしく（同い年の二人は入学が決まっているらしい）護衛にはちょうどいいとか。

年上の二人、まずは一つ年上で現在のＩＳ学園生徒会会長である、更識楯無（さらしきたてなし）さん。
どうやら父さんの知り合いである更識真透（さらしきまとう）さんの娘さんで現在の更識家の当主らしい。
ＩＳの腕も相当だとか。

んで二つ上の眼鏡で三つ編みの女性が、布仏虚（のほとけうつほ）さん。
楯無さんの幼馴染で従者だとか。
ＩＳ学園では整備科で主席らしいので今度エイクス整備を手伝って貰おうかな。

次が同い年の二人、この二人が俺の護衛役になるらしい。
まず、大人しそうで眼鏡をかけた少女、更識簪（さらしきかんざし）さん。
楯無さんの妹で、日本の代表候補性らしい。
ＡＥ社の情報によると織斑一夏の影響で専用機がまだ完成していないとか。

最後、見た目がぽやっとしてどこかのんびりゆったりとした雰囲気を出す、布仏本音（のほとけほんね）さん。
虚さんの妹で簪さんの幼馴染らしい。
あの長い袖の服はなんなんだろう？ファッションかな？

正直同い年の二人を俺が護衛するっていったほうがしっくりくる気がするのは何故だ？
う～んと俺が唸っていると。

「どうした？」

「あ、いえ、なんでもありません」

どうやら織斑先生に変な心配をかけたらしい。気をつけよう。
そんなこんなで教室の前に到着。

「私が合図を出したら入ってこい」

そういって織斑先生は先に入っていった。
そのあとものすごい音が教室ないから２回聞こえたがあれはなんだ？

少ししてから。

「四季、入れ」

合図があったのでドアを開け教室へ入った。
入った瞬間３１人（生徒＋先生）の視線が俺の方を向いた。
その視線には驚きや期待、疑問など色々な感情が込められているように思えた。
ただ俺はその視線を受けて思った。

（…面倒なことが起きそうだ…）

そしてその思いはその日の内に現実のものとなるなどこの時の俺は考えもしなかった。

6話（後書き）

楯無と簪の父親の名前が分からんから適当に付けちゃいました。
大丈夫ですよね？（ノ∀、）
本編通り学都と真透は知り合い、という設定。
ただ子供たちがあったのはつい最近と特に幼馴染の設定とかはいれませんでした。

今更だけど主人公の設定とか公開したほうがいいのかな？

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

7話（前書き）

活動報告にこの小説についてちょっとしたことを書きました。
見なくても問題はないので気が向いたら見てみてください。

7話

どうも、俺こと四季静和だ。

今俺は教卓の横に立ち、３１人６２対の視線を向けられているわけだ。

うん。ちょっとキツイな…

一人を除いて全員が女性っていうのも理由なんだけど…

あ、本音さんだ。

あとで挨拶しておこう。

「ついでだ四季。自己紹介をしろ」

「はい」

織斑先生命令（？）が出たのでそれに応える。

「皆さん初めまして。ニュースで知っているか人もいると思うが、アース・コロニー出身、四季静香だ。

趣味と特技は絵を描くこと、見ての通り公式では二人目になる男のＩＳ操縦者だ。これから1年間同じクラスメイトとしてよろしく」

「よし、では四季の席は織斑の後ろだ」

無難な自己紹介のあとタイミングよく織斑先生の指示があったので、皆の反応を待つことなく俺は自分の席についた。
皆タイミングを逃したのか若干困惑している。
困惑している理由はいくつかあるけどそのひとつは間違いなく俺の出身地だろうね。

アース・コロニーはＭＳの本家であるＡＥ本社がある人工島。
今現在ＭＳはＩＳに対抗できる可能性のある唯一の兵器。
……可能性がある、というのは世界に公表している情報で実際は対抗できるＭＳがいくつかＡＥ社に存在する……
そんなＭＳを開発している場所からＩＳ学園に入学するということはそれなりに意味を持つ。
ＡＥ社は大して気にしないが、女尊男卑が根付いている昨今の女性には何かしら思うことがあるのだろう。
だってそのバランスを再び崩しかねない存在を生み出そうとしているところの総本山なわけだし。
ま、俺は気にしない。
気にすると色々面倒だから…

「次に、諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。
私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

うん、なんという鬼教官発言。
なんだかんだいってキャリーさんも厳しかったけどこんな発言はな

……なか……ったよな？
ん？ま、まあいいか。
というか困惑じゃなく黄色い悲鳴というか声援が教室中に響いてるんだが。
やれファンだとか憧れだったとか、まあそれぐらいならいい。
なんたって我等が担任である織斑千冬先生はＩＳの国際大会モンド・グロッソ、それの第一回の総合優勝者なんだから。
でもさあ…

「私、お姉様のためなら死ねます！」

…これはないだろ…
俺が右手で頭を抑えながら前を向くと織斑先生はかなりうっとうしそうな顔をしていた。

「…毎年、よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

いや、まあこの反応を見ればそう思うのは判りますけど。
てかこの反応毎年なんだ…

ん～でもしょうがないと思う部分もあるんだよな。
ＩＳに関わる者、そして憧れる者にとって織斑千冬の名を知らないものは居ないとまで言われているほどの有名人だ。
モンド・グロッソ総合優勝者に与えられる称号、ブリュンヒルデの最初の受賞者なのだから。

ＩＳを学ぼうと学園にくる少女達からしたらまさに雲の上の人。
そんな人が近くにいるんだ、テンションが振り切れたっておかしくなないだろう……たぶん。
てか、織斑先生。本気でうっとうしがってないか？

「きゃあああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」

……うん、俺もこんな反応されたら先生と同じになると思う。
俺の前の席の人物、織斑一夏は織斑先生が担任だったことに驚いたのかなんかぼーっとしている。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

んー辛辣な言葉、肉親ゆえに余計に、か。
織斑先生は一応公私混同はさけてるみたいだ。

「いや、千冬姉、俺は――」

パアンッ！

うん、織斑一夏、面倒だ。織斑はどうやらそのあたりが出来ていないみたい。
まあ今まで普通の学生？だったぽいからその辺はしょうがないのかな？

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

こんなやりとりをするもんだから二人の姉弟という関係に気付いた連中が色々はことを言い始めた。
中には織斑先生の弟だからＩＳが扱える、とか馬鹿なことを言っている子もいたけどそれは関係ない。
そんなのが関係しているなら俺はこの場に居ないよ。

その後織斑先生の号令のもと１時間目の授業が開始された。

◇◆◇

んで終わった。
内容はＩＳの基礎理論だったんわけだが、これはアース・コロニーにいる間キャリーさんに叩きこられたから俺としては復習の意味を持つ。

途中暇になったときにＩＳの視覚センサーだけを起動して頭を動かさず教室を見渡したが、うん。
皆授業を真面目に受けているけど、やっぱりどこか俺や織斑を意識してるみたいだ。
しょうがないと言えばそれまでなんだけどどうもなあ……
織斑は織斑でなんかずっと頭抱えてたし。
…理由の一つは今の状況か…

俺達が置かれている状況を表す言葉があるとすれば「見世物」というのが相応しい。
近くに寄るわけでもなくかと言って無視するわけではない。
珍しい物の用に遠くから見るだけ。
そして一挙一動を話題にする。
まさしく見世物だな。
そんなことを考えていると…

「あ、今いいか？」

「ん？なに？」

と、織斑がこっちにむいて話しかけてきた。

「改めてよろしく。俺は織斑一夏。二人しかいない男、仲良くしていこうぜ」

「ああ、俺は四季静和。呼び方は常識の範囲で好きにしてもらっていい。よろしくな、織斑」

「じゃあ静和って呼ぶな。俺のことも一夏でいいぜ」

「ま、気がむいたらな」

「なんだそれ」

そのあと握手をしたわけだが、それを見た女子たちがキャーキャー騒ぐのだ。

「きゃああっ！二人が握手してるわ！」

「あれが男の友情なのね！」

「…織斑君×四季君、逆もありね…」

……頭いてえ……

仮に男の友情云々はいいよ。
ただ最後のやつ、なんだそれ！？
俺にそっちの趣味はねー！！
頭を抑える俺を苦笑しながら見る織斑。

「……ちょっといいか」

「え？」

そんな俺達に話しかけてきた子がいる。
声の方を向くとそこには、当たり前だが一人の女生徒がいた。
えっと、たしかこの子、篠ノ之博士の妹の篠ノ之箒さん、だっけ？

「…箒？」

「……」

どうやら俺の記憶は正しかったらしい。
というか二人とも知り合いなのか？

「…ああ、二人で話があるなら俺、席をはずそうか？」

そういうと何故か篠ノ之さんに睨まれた。
いや、これは元々目付きが悪いのか？それとも本気で睨まれたのか？

「いや、気遣い結構…廊下でいいか？」

なぜかフリーズしている織斑。なんで？

「おい、おりｍ「早くしろ」……」

「お、おう。静和、またあとで」

「…気にするな…」

二人が通る道を他の女子がざあっと空ける。
まあいいか、今のうちに本音さんに挨拶しとこうかな。
行動に移そうと思った矢先、マナーモードにしている俺の携帯が振るえた。
メールだろうか、それを確認するために携帯を開ける。

＝＝＝＝＝＝＝

ｆｒｏｍ：布仏本音（ほんねさん）

Ｓｕｂ：ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ

本文：
今はダメー（・Ｘ・；）
あとでね～

＝＝＝＝＝＝＝

パタン

……ふむ、今はダメ……確かに今の状況で俺から本音さんに話しかけるといらぬ噂が立ちそうだ。

それに今じゃなくても会う機会はいくらでもあるしその時でいいか。
てかよく俺が話し掛けようって気付いたな。
あの子何気に人の空気とか行動読むのうまいのか？
しょうがないので休み時間の残りはノートに絵を描く事にした。

「あ、四季君が何か描き始めたよ」

「確か趣味と特技が絵を描くことっていってたよね？」

「どんな絵を描いてるんだろう？」

……唯一の癒やしが癒しにならねー……

暫くすると二時間目の開始を告げるチャイムが鳴り始めた。
篠ノ之さんをはじめ他の女子も皆席につくなか、織斑だけが何故か教室の出入口で立ち止まって考え事をしていた。
そんなことをしているともちろん…

パアンッ！

「とっとと席に着け、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

こうなる。

あいつの頭の細胞は大丈夫か？

◇◆◇

二時間目が始まったのだがどうも織斑の様子がおかしい。
教科書をガン見して唸ったり隣の席の子を見たり。
なにしてるんだ？

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

さすがに織斑の異常に気付いた山田先生が話しかけている。

「あ、えっと……」

そんなことを言って教科書と山田先生の顔を交互に見ている。
本当になにしてんだ？

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

えっへんと胸を張る山田先生。

うん、見た目や言動ではわからないけどこの人もちゃんと先生なんだな。
と、かなり失礼なことを俺は考えていた。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

……は？

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

山田先生がかなり、というか凄い困った顔をしてる。
いや、まあ誰だっていきなり全部わからんって言われたら困惑するよね。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないって言う人はどれぐらいいますか？」

不安そうになりながら挙手を促す山田先生。
しかしそれに手を上げるものはいない。
たしか入学前に参考書が配布されてそれを読んでおくように言われ

たはずなんだが。
少なくても読めば全くわからない、なんてことはないはず。
俺の場合は特殊だからあまりアテにできないけど。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンッ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

ば、馬鹿過ぎる…いくらなんでもあれを捨てるとかどうにかしてるぞ。

「あとで再発行してやるから一週間で覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

織斑先生の有無を言わせぬ威圧感、すごいね。
しかもめっちゃ睨んでるし。わからなくもないけどさ…

「……はい。やります」

でも再発行とか面倒だし時間かかるよな。
だったら……

「織斑先生」

「なんだ。四季」

あの、お前も何か問題があるのか的な視線はやめてください。
俺は内容全部とまではいかないけど８割９割がた覚えてますから。

「織斑には俺の参考書を渡すのはどうでしょう？再発行ですと時間が掛かりますから」

「それだとお前の参考書がなくなるが」

「それなら大丈夫です。内容は８～９割覚えてますし、あれとは別の参考書を持ってるので問題ありません」

俺の発言に教室中がざわめいた。
あの分厚さをほとんど覚えてると言われりゃそうか。
織斑なんて、マジかよって顔してるし。
マジだよ。
でも俺の場合２年も時間あったわけだし、研究所の人やキャリーさんのおかげでより詳しく知れる機会があったから、当たり前といえ

ばそれまでなんだけどね。
ちなみに俺の持っている専用の参考書はキャリーさん監修、研究所の人達製作の特別なやつ。
ＩＳ学園が発行するのと大差ない内容になっていたりする。

「ふむ……織斑。授業後四季から参考書を受け取れ」

「…はい」

「それと四季」

「なんでしょうか？」

「ついでだ、織斑に教えてやれ」

……え？

「えっと…それは教師としての命令でしょうか？出来るならやりたくないのですが…」

「そうだ。もしできないのならばそれ相応の理由を上げろ」

なんという鬼教官っぷり。
しかもなにそのお前以外以上の適任は居ないだろう的な目。
教師が教えりゃいいじゃん！

「……正直面倒臭い」

ズパアンッ！！

「却下だ。お前が教えろ」

「ぬおおおおおっ！？！？」

な、何だ今の音と威力！？
織斑の時より音がひどくないか？
俺が叩かれたところを抑えて悶絶している間に話は進んでいき。

「えっと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張って？ね？ねっ？」

「や、山田先生。命令が降りたので俺も参加します。不本意ですが…織斑。そういうことでしっかり覚えろよ」

「お、おう。それじゃあ、静和、山田先生、放課後によろしくお願いします」

織斑はそう言って席についたが今度は山田先生がおかしい。

「ほ、放課後…放課後に男子生徒二人囲まれて補習…生徒と先生…」

頬を赤く染めて何か妙なことを言い出してる。
もしかして山田先生って妄想癖があったりする？
いや、思い込みが激しいのかな？
ＩＳにずっと関わって来ているなら比較的男に免疫がないからなのか？
ようわからん……

その後織斑先生の号令で授業は再開された。
結局この時間、織斑はずっと唸りながら授業を受けていた。
こいつ本当に大丈夫か？

面倒ごとが増えた…なんだろう。
今日はまだまだ面倒ごとが起きそうな気がする……

7話（後書き）

原作４５ｐ目ぐらいまで、次回はセシリア初登場回。

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

8話（前書き）

セシリア登場。そして今回主人公の口癖が大量にでてきます。
もしかしたら不快になる方がいるかも？

8話

どうも、俺こと四季静和だ。

二時間目も約一名を除き、無事終了したわけだ。
織斑は目の前で机に突っ伏しているから話しかけるもの面倒だなので、俺はこの休み時間をどう過ごそうか考えていた。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「ん？」

そんな俺達に話しかけてきた一人の女子。
縦ロールの入った金髪にブルーの瞳。
どこか高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気は「いかにも」今の女子といった感じがする。
その顔を見た俺は見覚えがあったので少し記憶の海に潜ることにした。

……そうだ、たしかイギリスの代表候補生のセルシオ……ウォルコットだったか？

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

「すまん、考え事をしていてあまり訊いてなかった」

俺と織斑がそう答えると目の前のセルシオ……さん？がかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！なんですの、そのお返事と態度は。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「……」

ああ、俺の嫌いなタイプだ。
織斑も嫌い、とまではいかなくも苦手らしく顔に出ている。
ＩＳが使えるから偉い。まあ間違いじゃないさ。
ＩＳはまだ国家の軍事力の要でもあるわけだからな。
でもそれを力として無闇に振りかざすのは違うだろう。

……相手にすんのめんどくせー……

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「イギリスの代表候補生のセルシオ・ウォルコットだっけ？」

織斑は多分自己紹介全てをちゃんときいてないだろうな。
織斑先生のことが相当ショックだったみたいだし。
かく言う俺もまだクラスの女子の名前はうる覚えだ。
正直イギリスの代表候補生である彼女の名前も当てずっぽだったりする。

「セシリア・オルコットですわっ！あなた達、イギリスの代表候補生にして入試主席のこのわたくしを知らないと！？」

セシリア・オルコットね、情報修正しとこ。
また間違えると色々面倒だし。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の勤めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。

俺やオルコットさんを始め、聞き耳を立てていた女子達がずっこけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

これはオルコットさんに同意だ。
てか言葉の音で大体想像がつくだろうが。

「おう。知らん」

オルコットさんは怒りすぎて冷静になったのか、こめかみを人差し指で押さえながらぶつぶつと何か言い出した。

「信じられない。信じられませんわっ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

いや、たぶん織斑が例外なんじゃないか？
あと島国っていったらイギリスもだと思うんだが。

「で、静和。代表候補生ってなのことだ？」

「お前…音で判断できるだろう？代表候補生、国家もしくは企業代表ＩＳ操縦者、その候補生に選出されたやつのことだ」

「つまりエリートのことですわ。……あなた、単語からの想像もできませんの？」

「そういわれればそうだ」

なんつうかこいつは……
仮にＩＳのことについて知らなくても、まあいいだろう。
オリンピック候補生とかいるんだから候補生に関してはダメだろう。
どんだけしらねーんだよ。

「そう！エリートなのですわ！」

復活したオルコットさんは織斑に人差し指をぴしっと向けた。
つか指近くないか？鼻に当たるぞ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「…幸運…ねぇ…」

「……馬鹿にしていますの？」

織斑はしらんが俺は馬鹿にしてるよ。というか話すのも嫌だ。

「大体、そちらの方は違うようですが、あなたはＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。ただ二人、男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね。」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「……」

織斑の入学に関して何も知らないのはそっちだろう。それにＩＳは最悪感性だけで操縦ができるから知識はさほど必要としないぞ。期待も勝手にして勝手に期待外れというな。

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ」

優秀なのは候補生から想像できるが、優しく、ねえ。欠片も感じられん。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれた

ら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

俺には必要ないし、織斑については今のところ俺と山田先生で教えることになるってさっき授業で言ってただろう。
それにしても教官達を倒したか。
よくもまああの鬼畜試験を…専用機を使ったとしてもこれは素直にすごいな。

「入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

「へえ、織斑意外にやるな。俺なんて３人までが限界だったよ」

「「「は……？」」」

俺の言葉が意外だったのか、オルコットさんだけじゃなく織斑や俺達の会話を聞いてた女子全員から疑問の声が上がった。
てかクリアした織斑やオルコットさんに比べりゃ驚くことでもないだろうに。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？それに、あなたっ！3人とはどういうことですの！？」

「オルコットさんだけってのは女子だけってオチだろう。それよりも俺何か変なこといったか？」

「いってるって。3人ってなんだよ？なんで静和は3人も戦ってるんだ？」

……ん？なんか情報の食い違いがあるみたいだな。

「情報の食い違いがあるみたいだな。入試ってのがＩＳを動かして教官と戦う。これはいいよな？」

「「ああ（ええ）」」

「んでその時の条件は？」

「もちろん一対一。使用するＩＳは自由だったはずですわ」

「……は？」

「どうした？」

いや、どうしたってお前。俺が受けたのと違う。

「いやな。俺が受けたのは、俺一人対教官四人、使用するＩＳは打鉄かラファール・リヴァイブで専用機は禁止、制限時間２０分ってやつだったんだけど……」

「「「……」」」

「結局時間切れで三人までしか撃墜できなかったんだ。思い出すだけで嫌になるような試験だったな」

俺の言葉に教室中が静まりかえった。
たしかに俺と皆の入試内容が違うのはおかしいが……

「ど、どういうことですの！？何故教官四人と戦っていますの！？」

「いやしらないよ。あと、とにかく落ち着け」

「これが落ち着いてられ――」

すると三時間目開始のチャイムが話に割って入ってきた。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

そう言い捨てオルコットさんは席に戻っていた。
周りで見ていた女子達も各々の席に着く。
というか逃げたくても同じ教室だから逃げれないし、それによくね

ーよ。

……めんどくせー……

三時間目、教壇に立つのは山田先生に変わって織斑先生。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

武器特性か、これって結構大変なんだよな。
普段は別として戦いながら考えるのって結構難しい。
それよりも何故か山田先生までノートを手にもっている。
……なんで？

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表者、か。他のクラスはどうなるんだろう？

後で知ったことだけど４組のクラス代表は簪さんになった。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。

今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで。」

ざわざわと教室が色めき立つ中俺は

（ふむ、なかなか面倒くさそうじゃないか）

なんて考えていた。あと嫌な予感が凄いする。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「はいっ。私は四季くんを推薦します！」

……や、やっぱりこうなるか……

「お、俺！？」

織斑つい立ち上がってしまうがそんなことしたら余計皆の注目を浴びるだけなのに…

「織斑。席に付け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないならこの二人から選ぶことになるぞ」

「ちょ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――」

「自薦他薦は問わないといった。他薦された者には拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも――」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

机を思いっきり叩いて立ち上がったの、オルコットさん。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

…いやだったら自薦しろよ。
織斑先生は自薦他薦問わはいといってたの聞いてないのか？
それとも自分なら他薦されると思ったとか？
……自意識過剰も大概にしろよな……

「実力から行けば代表候補生であるわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿や人工島の猿にされては困ります！
わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

ほうほう、俺らを猿。さらに一応はＩＳ発祥国である日本に対してそんなことをいうなんてな。
オルコット……いい加減鬱陶しいくなってきたな。
ただ今関わると面倒ごとが増えそうだからしばらく我慢か。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「……」

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛ですし、アース・コロニーでしたか？
あんな人工島でＩＳにも劣る物を開発し続ける馬鹿な連中な――」

……限界だ……

「……巫山戯んな…」

俺が座ったままいつもより低い声を発した瞬間クラスが静まりかえった。
さすがに俺も故郷を侮辱されたらな…
そんな中織斑が

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何

年覇者だよ」

織斑、さすがにそれはない。イギリスにもいいところはあるぞ。

織斑はおそるおそる、俺はちらっと後ろを向くと、怒り心頭で顔を真っ赤にしたオルコットがいた。

「あっ、あっ、あなた方！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱したのはそっちだ。それを棚に上げ自分は被害者面か。イギリスの代表候補生もこの程度か」

俺の言葉を受けオルコットはさらに怒りのボルテージが上がったようで全身がぷるぷる震えている。

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「……」

ちょうどいい。

織斑のデータやイギリスの第3世代のデータをとらせてもらおう。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

「真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう…ではイギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

「……無様な姿にならなきゃいいがな」

俺の言葉にオルコットはギロりと睨んできたが俺はそれを受け流した。

相手にするのも面倒だ。

「ハンデはどのくらいるける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺達がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

織斑のこの発言でクラスからドッと爆笑が起きた。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんや四季くんは、確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎだよ。」

その言葉に織斑は「しまった」という顔をしている。
でもこの時の俺はそんなことは見ていなかった。
なぜなら……

「……ククク、クハハ、アーハッハッハッハッ！」

そう笑っていてそんなことを見る余裕がなかった。
そして笑う俺にクラスの皆は、先生たちも何事かと視線を向けてくる。

「し、四季くん？」

「ククク…ああ、山田先生大丈夫です。どうもおかしくてね。笑いが止められませんでした」

「な、何がおかしいんですの？」

オルコットの言葉はおそらく織斑先生を除く全員の代弁だろう。
それに対して俺は立ち上がって、そしてオルコットの正面を向いて答えた。

「なあに簡単だ。君たちの勘違いについて笑っただけだ」

「勘違い……？」

「そう、勘違いだ。別に今だって女が男より強いってわけじゃない。まあ逆もだけどな。さっき言ってたが本当に俺は君たちより弱いか？ＩＳを使わなくても、だ。

たしかにＩＳを使えば強くなるだろう。だがＩＳを使ったとして同じＩＳを使う俺や織斑に君たちは勝てるのか？。

代表候補生のオルコットは別にいい。腐っても代表候補生だからな。織斑には勝てるだろう。でも他の皆のＩＳ稼働時間は織斑と大差ない。だったらなぜ自分が、女が男より強いと言える？それに…」

「…それに？」

「まだ非公式だけど、ＡＥ社はＩＳに対抗しうるＭＳの開発に成功している。つまりＩＳによる絶対的戦力差と男女格差はいずれなくなるさ」

俺の最後の言葉にはさすがに織斑先生も目を見開いていた。

今まで最強の兵器として存在していたＩＳの地位を誰でも、男でも操縦することができるＭＳが脅かすのだ。

女尊男卑に染まっている今どきの女子には信じられないだろうね。

「まあ、まだ非公式だし世界中に流通するのは先になるけどね。あとオルコット」

「な、なんですの？」

先程の内容がショックだったのかいきなり話しかけられたオルコットは身体をビクッと震わせてこちらに向き直した。

「たかだが代表候補生ごときが粋がるな」

「な……っ！」

何か言おうとしたみたいだが俺がおもいっきり睨んだので言うタイミングをのがしたらしい。

「ね、ねえ。四季くん。今からでも遅くないからセシリアには謝った方がいいんじゃない？」

おそらくこの子は俺が代表候補生であるオルコットには勝てないと思っているのだろう。
確かに俺は公式で二人目の男のＩＳ操縦者。
つまりＩＳ稼働期間も短いと思っているんだろう。

「大丈夫だ。問題ない」

「え？さすがに代表候補生を舐めすぎだよ」

「大丈夫。たかが候補生ごときに企業代表である俺は負けないさ」

俺のこの言葉に再び教室は驚きに包まれた。
そういえばこれを知ってるのって教師でも数名って言ってたっけ？
ま、いずれバレるしいい……あ、キャリーさんに怒られるかも。

「さて。話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、四季、オルコットはそれまでに用意をしておくように。
対戦方式は総当り戦。当日にくじを引いて順番を決める。以上だ。
それでは授業を始める」

授業が開始されたが、いやはや面倒なことになった。

（一週間。織斑はわからないけどオルコットのデータは集めれるな。
あとで本社の方に連絡をとろうかな）

そして三時間目の授業は進んでいくのだった。

8話（後書き）

全然進んでないけど今回はここまで。
今回主人公の新たな一面というか事実が判明する会でした。
まあ最後の方に少し出てきた程度だけど……

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

9話（前書き）

今回から徐々に原作と違いが出てくる予定です。
というか作者が各原作キャラの性格を把握していないのでタグに「キャラ性格変化」を追加しました。
……だから性格変わってたりしても許してねー（ノ∀、）

最後の方にある人物が急遽出演しております。
お楽しみに。

9話

どうも、織斑一夏です。

今俺は机の上でぐったりとうなだれている。
なんとか放課後まで乗り切った……乗り切った？
授業は専門用語の羅列でさっぱり。
辞書もなけりゃ参考書を読んでいない俺にはさっぱりだった。
放課後に教えてくれる約束をした静和は今、俺のために参考書を取りに行ってくれている。
持ってきた荷物ごと教務室に置いているらしい。
んで、放課後になったとは俺の置かれている状況はまったく変わっていない。
いや。半分は静和の方に行っているからまだマシだけど、全学年、全クラスから女子が押しかけて俺を見ている。

（勘弁してくれよ…）

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。四季くんの言った通りですね」

「はい？」

呼ばれて顔を上げるとそこには書類を持った山田先生と旅行にでも行くような量の荷物を持った静和がいた。
うん、二人が並ぶと身長差と見た目のせいで兄妹に見えるな。
もちろん妹は山田先生。
そういえば静和は俺よりも身長がある。たしか１８０ぐらいとか言

ってたな。

（……俺もまだ成長期だ。焦ることはない！）

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書いた紙とキーを渡す山田先生。
ここＩＳ学園は全寮制であり、寮生活が義務付けられている。
これはＩＳ操縦者の保護っていう名目もあるらしい。

「俺の部屋って決まってないじゃなかったですか？確か一週間ぐらいは自宅から通学って話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りも無理やり変更したらしいです。…そのことで織斑くんは政府から何か聞いてます？」

最後の部分は俺にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。
いや、そう言われても何も聞いてないんだけどな……

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば部屋の方も用意できますからしばらくは相部屋で我慢してください」

「あ、部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備で

きないですし、今日はもう帰っていいですか？」

こんなことになると思ってなかったから荷物なんて持ってきていない。

たぶん静和の荷物は寮生活用の荷物なんだろうな。

「あ、いえ、荷物なら――」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

ああ、この声、絶対に千冬姉だよ。

見ると静和の後ろに出席簿を持った千冬姉がいた。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

え？そんだけ？いや、確かにその通りだけど、人間には日々の潤いというのも大事だと思うんです、千冬姉。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。

学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんと四季くんは今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

俺、大浴場好きなのに。

「織斑、馬鹿かお前…」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

そうだった。男子って俺と静和しかいないんだった。

「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

何をいうんですか山田先生！というか、普通にダメだろ。倫理的に。

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それじゃあ、まさ

か四季くんが……そ、それはそれで問題のようが……」

やべえ、この人結構人の話を聞いてないぞ。
周りの女子はきゃあきゃあ騒いでるし。
しかも内容が……

「織斑くん、男にしか興味ないのかしら……？」

「織斑くん×四季くん……いや、身長の差で四季くん×織斑くんのほうが……ありね」

「強くでた四季くんに断れず受け入れてしまう織斑くん……これだわっ！」

……所謂『婦女子談義』とやらが花咲いていた。
なんなんだよまったく。
俺と同じくそれを聞いた静和はこめかみを右人差し指で抑え苦い顔をしていた。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、四季くん、寄り道せずちゃんと寮に帰るんですよ」

校舎から寮まで五十メートルくらいしかないんだから、寄り道も何もないと思うんだが。
まあいいや、とにかく部屋に行ってこの視線地獄から開放されよう。

「静和、いこうぜ」

「……ああ…」

何か考え事をしているのか静和の反応が鈍い。
そういや、三時間目からずっとこの調子だけど、どうしたんだ？

◇◇◇

ああ、やっちまったなあ。
一応あのあと皆には驚かしたことについての謝罪の言葉は言っておいた。
ただしオルコットには改めて宣戦布告しといたが。

「……はあ」

「どうしたんだ」

「いや、なんでもない」

「そうか。何かあったら俺に言ってくれよ」

「……ああ」

今俺と織斑は寮へ向かっている。
俺は事前に寮生活をすることがわかっていたから荷物を持ってきていたが、織斑には通達がうまくいっていなかったのか今日改めて通達されていた。
というかだ。政府もだけど学園、ちゃんとしろよ。
俺と織斑の境遇を考えたら、いや、ＩＳ学園なら寮に入らないといけないんだからしっかりと頼むよ。
こんなんだから俺も安全面で心配になるんだ。

まあそんなことはいい。さっきから俺が気にしてること。
それは三時間目のときの『企業代表』発言だ。
いや、あれについては間違いじゃない。
たしかに間違いじゃないが、厳密に言えば俺は企業代表じゃない。
俺は企業代表補欠なんだ。

そう、補欠。あくまで企業代表であるキャリーさんに何かあった時のための予備だ。
キャリーさんとの戦績はまだ勝率３割ほど。
そりゃ実力はそこらの代表候補生よりはあると自負している。
けど俺の場合色々と当てにならないんだよな。
キャリーさんとしか模擬戦したことないし……
シュミレータを使った訓練もしたけど、あれはあくまでシュミレータ。
モンド・グロッソ出場者とＩＳのデータっていっても過去のデータだしな。

まあいいや。とにかく一週間後の決定戦までは普段の基礎訓練をすればいい。
あれって意外とバカにできないしね。

っと、そんなことを考えていたら寮についたみたいだ。
そういえば部屋ってどこだっけ？

「ああ、１０３２室か」

「……え？」

「どうした？」

「いや、俺の危機間違いじゃなければ、静和の部屋って１０３２室？」

「そうだけど……ん？織斑、部屋番はっ？」

「……１０２５室」

「「……」」

ど、どういうことだ？
二人しかいない男を別々の部屋にする理由はなんだ？

「……とりあえず、織斑。これ渡しとく」

一時考えるのをやめた俺は、織斑に渡す予定だった参考書をカバンから出した。

「……あ、ああ」

それを織斑も受け取って、とにかく寮前にずっといるのもあれなので各自の部屋に行くことにした。
途中までは一緒なので必然的に一緒に歩くのだが…

「「……」」

お互い何故部屋が違うのか考えているため会話がない。
それは織斑の部屋の前につくまで続いた。

「あ、俺はここだ。それじゃあ静和……」

「ああ、それじゃあな……」

織斑と別れた俺はとりあえず自分の部屋に向かうことにした。

「１０３０、１０３１、１０３２。ここか」

一度部屋の前で止まり扉を見る。

（ここで止まってても意味はないか）
鍵を入れて確認すると鍵はかかっていなかった。
……何か嫌な予感がする……
ガチャ。
とにかく部屋に入ることにした。
「あれー。かんちゃん、戻ってくるのはやいねー、どしたのー？」
「え？」
「ほえ？」
扉を開けた部屋の中。そして２つあるベッドの上にいたのは本音さんだった。
本音さんはピ〇チュウの着ぐるみのようなパジャマを着ていた。
サイズが合っていないのかわざとなのか、腕の裾の部分が妙に余ってる。
部屋着だから楽な服装にしているのか？
いや、今はそんなことは重要じゃない！
「ご、ごめんっ！部屋間違えた！」
「きゃっ」

そうしてすぐに振り返って部屋を出ようとした俺に何かがぶつかった。

「ごめん。急いで、たん…だ……」

「いたた、こっちも…前見てなかったから…」

そこには一人の女の子が尻餅を付いていた。
そしてその子に俺は見覚えがあった。
だってその子は俺のもう一人の護衛である…

「か、簪さん？」

「…え？四季…くん？」

「どうしたのしーくん？」

「ごめんっ。ちょっとまってっ」

そういって俺は部屋の外に出て持っている部屋番が書かれた紙と部屋の番号を確認する。

……１０３２……

合ってる。合ってるけどなんで二人が？

「しーくん。そんあにあわててどうしたのー」

俺の様子を二人ともおかしく思ったらしく、本音さんが尋ねてきた。

「ああ。本音さん、簪さん。ちょっと訊きたいことがあるんだけどいいかな？」

「いいよー」

「…ええ」

二人の許可が降りたので訊いてみよう。

「二人の部屋って何号室？」

「１０３２だよー」

「…１０３２です」

……うん…これはまずいな

「そういえばー、しーくんの部屋ってどこー」

「……１０３２」

「「えっ？」」

うん。どうやら二人とも聞いてなかったみたいだね。
しかし二人部屋で三人、それ以前の問題として１５才の男女が同じ部屋とか。
やばい…どうしよう……
…面倒くさいことになってきたぞ…

そしてこの時、織斑の方も色々あったらしいが俺には関係ない……ないよな？

9話（後書き）

急遽出演したのは簪でしたーｖ（・∀・）
あと本音と簪の部屋がわからないので勝手に決めちゃいました。
静和が絡むからこの辺はしょうがないと受け取ってください（ノ∀、）

そういえば昨日の投稿からお気に入り登録が急激に増えました。
投稿直後　６０程　↓　１４日２２時時点　１７０以上
私の小説をこんな大人数に読んでいただけるとはびっくりです。
作者はこれからもマイペースで頑張っていきます！
…マイペースに（、∀、＊）

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

１０話（前書き）

相変わらず進行速度は遅いです。

今回はある意味オリジナルの話です。

１０話

どうも、俺こと四季静和です。

……どうしてこうなったっ！？

いや、マジで、どうしてこうなったんだ？
確かに二人は護衛って形にはなってる。なってるけどなんで同室？
思春期の異性を同室とか、色々とやばい気がする。
……もしかして本社のせいか？
いや、弦司郎さん達は勿論キャリーさんも、何だかんだ父さんもその辺の常識はしっかりしてる。
だから本社の意向とは考えられない。
となると、ＩＳ学園……いや、形は特殊とはいえ教育機関がそんなことをするわけないか。
となると日本政府？
……最近聞く日本の政治不振や対応の遅れならありえそうだ。
あとは……更識家か？
それこそ自分の娘がいるのにそんなことするわけないか。

「しーくん？しーくんっ。しーくーんっ！」

「うあはい！」

「やっと反応したー」

「あの…ずっと考え事、してたみたいですけど…どうしたんですか

？」

どうやら思考の海に潜ってたみたいで、本音さんの呼びかけが聞こえてなかったみたいだ。
そういえば、二人はこのことを聞いてるのか？
反応からして聞いてないと思うが一応確認しとくか。

「あー、二人は俺と同室になるって聞いてた？」

「私は聞いてないよー。今知ってびっくりだよー」

「…私も…今知ったから驚いてる」

ということは……ああ、考えても始まんねー

「それよりー。入口でずっと話すのもあれだし、中に入らない？」

「ああ、それじゃあ、お邪魔します」

「どうぞどうぞー。ん？この場合っておかえりなさーい、なのかなー？」

「本音…その話は落ち着いてから。…私もだけど、四季くんもまだ動揺してるから」

「ういー」

◇◆◇

とりあえず俺は部屋に入ることになった。
俺は部屋に備え付けの椅子に、二人はそれぞれのベッドに座ってお互いをうかがっていた。
いや、本音さんはずっとニコニコぽやーっとしてたし、簪さんは少し頬を染めて俺をチラチラ見ていた。
簪さんは多分だけど男に免疫があまりないんじゃないだろうか？
初めて会ったときもなかなか喋ってもらえなかったし、手を触れただけで相当動揺してた。
本音さんは……わからん。わからんが彼女の笑顔を見ていると何か癒される…
本音さんの笑顔で癒された俺は、とりあえず復活し話を始めることにした。

「話を始めるけど大丈夫？」

「問題なーし」

「だ、大丈夫」

「はーい」っと手を挙げて答える本音さんと、腕を胸元当たりでグッと握って「何時でもこい」って感じの簪さん。
なんだろう、見ていて微笑ましい。

「とりあえず問題なのは、俺達が何故か同室ということ。んで次に、仮に。仮にだよっ？同室だったとして、何故か二人部屋に三人という事態になっていること。
勿論前者は一番に解決しないといけない問題なんだけど、これは俺から寮長と学園に話を付けておくよ」

「りょうーかい。でもでも、そうするとしーくんの寝るところはどうなるの？」

「この部屋だと問題が解決したことにはならないし…」

そう、簪さんがいう通り結局部屋が用意されるまでここにいるのでは解決にならない。
だが俺にはなんとかできる秘策がある。

「それなんだけど、なんとかできるかも。というかする」

「おーっ。どうするの？」

俺はガサゴソと荷物の中からアル物を探し、取り出す。
それはグリーンとグレーの大小２つの筒状のもの。

「しーくんー。それなに？」

「それは？」

俺が出した物に二人とも疑問の声を上げた。

「ああこれはね、小さい方が寝袋で大きい方が簡易テントだよ」

「なんでそんな物を？ＩＳ学園は全寮制なのに」

「念のためだよ。まさか早速使うことになるとは思ってなかったけどね」

俺は苦笑いを浮かべた。だってそうじゃないか。
事前に全寮制ということは聞いていた。
でも、もし、何かあったらと思って持ってきた保険を早速使うことになるなんて誰が思う？

「地図で見たんだけど、寮の近くの砂浜かどっかの木の下にでも行こうかな。ま、寮長との交渉次第だけどね」

「それだとしーくん、外で寝ることになっちゃうよ？」

「そうだね」

「ま、まだ春先だけど、寒いから風邪、引いちゃう…」

「こう見えて身体は丈夫な方でね。最悪ＩＳのシールドエネルギーでなんとかするさ」

「「……」」

やはり納得できないみたい。どうにかするにも、良い案が浮かばないらしく顔を俯けて考え込んでいる。

「護衛役のことも、了承してもらってるけどさすがに同室は、ね……。同い年だし、色々とまずいでしょ…」

というか俺がまずい。
二人とも確実に美少女の部類に入る程可愛いし、俺も、まあ年頃な男なわけで。
色々と大変なんだよ。主に理性が……。

「「「……」」」

三人ともどうしたらいいものか考え始めたため、静寂が室内を支配する。
このまま考えてても埒があかないし、とにかく寮長に話に行こう。

「あ〜、じゃあ俺、これから寮「しーくんっ！」…ん？」

立ち上がって部屋を出ようとしたら本音さんが声を上げて俺を止め

た。

「あ、あのねー……」

「……」

二人の方を向くと頬を赤く染めながらソワソワしていた。
そして二人は顔を向き合わせて頷いたあととんでもないことを言い出した。

「あ、あのねー。しーくんがよければだけど」

「お、同じ…部屋、でも…大丈夫で、で、ですよ……」

さあ、皆さんここで想像してみてくれ。

現在俺は立ち上がって部屋を出ようとしている。
そして二人はベッドに座ったまま。
二人ともそれほど身長があるわけでもないので、たとえベッドに座っていても身長の高い俺よりも目線が下になる。
さらに恥かしいのか、顔を若干俯かせている。
その状況で俺の方を見ると、どうしても上目遣いになってしまう。

……もうお判りだろうか？

見た目完全に美少女な二人が、頬を赤く染めながらやや上目遣いで「一緒の部屋でもいい」と言ってきた。

この破壊力は凄まじい！

「ーーーーっ！！お、俺っ！寮長室に行ってくるっ！」

俺はそう言って、慌てて顔を背け部屋の外へ出た。
いや、出るしかなかったと言った方が正しいかも。
部屋のドアを締めそれ背にもたれ掛かり、息を整える。
たぶん今俺の顔は真っ赤だと思う。自分でもわかるくらい顔が熱いからな。
とにかく少しでも落ち着こう、そう思っていたがなんというか運が悪かった。

何故か、いや寮だから普通か？
何人もの女子が廊下に出ていて何やら騒ぎのあった部屋の前に集結していた。

「あれ？四季くんだ」

「ああ、本当だ」

「四季くんって部屋ここなの？」

などと言いながら俺の方に寄ってくる女子達。
ただ寄ってくるだけなら、まあいいだろう。
でも今はやばい。なぜやばいか。

皆部屋着、つまりラフな格好をしているからだ。
しかも俺と織斑以外が女子ということもありノリは女子寮のそれ。
つまり結構大胆な格好をしているのだ。
例えばタンクトップにホットパンツだけとか……

「あーーっ、お、俺。これから寮長室にいかないといけないんだっ。
だから部屋のことはまたあとでっ」

俺はなるべく女子達を見ないように足早にその場を立ち去った。
本音さんと簪さんの一撃（？）が響いたため、正直俺の理性は限界に近い。
一刻も速く心を静めないと。
そう思いながら俺は寮長室へ向かった。

◇◆◇

コンコン。

「誰だ？」

「1年1組、四季静和です。部屋のことについてお訊きしたいことがあるので来ました」

「……入れ」

「失礼します」

寮長室に入ってまず驚いたのは部屋の汚さ。そして次に驚いたのは、寮長が我がクラスの担任である織斑先生だったということ。

「……」

「どうした。部屋のことで話があるのだろ？」

「あ、はい。そのことなんですけど…」

織斑先生のあまりのイメージの違いに一瞬フリーズしてしまった。あれだ、所謂掃除の出来ない女性なんだな。

ゴッ！

「ーーーぃいったーっ」

「失礼なことを考えるな」

「は、はい……」

なんでわかったんだろう？それはとにかく部屋のことだ。
部屋割りについて織斑先生に話をした。

「…ふむ」

「普通、いや、常識的に考えていくらギリギリだったとはいえ、俺と織斑を同室にしません？自分で言うのも変ですけど、思春期のこの時期に家族でもない男女が同棲ってダメな気がします」

「四季。お前のいうことは最もだ。だがお前の場合、ＡＥ社側からなるべく護衛役である更識と布仏の近くにするように申請があった。……まあだからといって同室にする理由にはならんがな。あいつもこれぐらい気にすれば少しはましなのだが…」

おそらく織斑のことだろう、織斑先生は軽く溜め息を吐きながら米神をおさえていた。

「しかし今から部屋割りを組み直すとしても少し時間がかかる。その間お前はどうするつもりだ？」

「ああ、そのことですが…」

ここで部屋が変わるまでテント生活をすることを提案。
安全性に関しては最低だけど、まあ最悪学園の更衣室とかでもいい

しね。
俺の提案に織斑先生は腕を組み顎に手を当てて考えている。

◇◆◇

その後俺と先生は夕食の時間になったため、話を切り上げ食堂で食事をとった。もちろん別々で。
このとき女子からの視線がキツかった。まあ初日だし我慢するしかない……
ちなみに食事は一人で取りました。
織斑？俺が食い終わってから、食堂に来たからその後はしらんよ。

食後、一度寮長室に再び織斑先生と戻り話し合いを始め、結果一週間。
長くともクラス対抗戦頃までになんとかするということが決まった。
寮長室を後にした俺は、まず荷物が置いてある１０３２室に向かった。

コンコン。

「…はい…」

「あ、俺、静和です」

「……あ、あいてます」

「失礼します」

部屋に入るとそこには髪を下ろし、薄い水色のパジャマを着た簪さんがいた。
俺を見てさっきのことを思い出したのか顔が若干赤い。
その姿を見た俺の口は自然と動いた。

「……か、可愛い……」

「えっ！？」

簪さんは俺のボソッと言った独り言が聞こえたらしく、それはもう「ボンッ」という擬音が聞こえそうなくらいの勢いで顔が真っ赤になった。
なんとも言えない微妙な空気が部屋を支配する。

「あ、い、いや。あー……そうそう。荷物を取りに来たんだよ」

「……」

「織斑先生。ああ、寮長が織斑先生だったんだけど、話をした結果一時的にテント暮らしをすることになったんだ。だから荷物を、ね」

「……」

「それじゃあ俺、行くねっ。本音さんにもよろしく！」

「……あっ」

俺はすぐさま部屋を出て移動した。
んで寮を出た俺は、寮長室の窓から見えるところにテントを張った。
こうすれば織斑先生の目も届きやすいということで納得してもらった。

その日シャワーは、織斑に頼むことにした。
そこで織斑同室が篠ノ之さんということを知った俺は頭を抱えた。
本当にこの学園は何を考えてるんだ？

シャワーを浴び、テントに移動した俺はすぐに寝ようと思ったが、
その前に本音さんと簪さんにメールを送ることにした。

＝＝＝＝＝＝＝

ｔｏ：布仏本音（ほんねさん）

Ｓｕｂ：おやすみ

本文：
今日は色々あったけどお疲れ様。
テントの位置は寮長室の窓の近くに落ち着いたよ。

それじゃあ、おやすみなさい。
また明日教室で。

＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝

ｔｏ：更識簪（かんざしさん）

Ｓｕｂ：おやすみ

本文：

さっきはいきなり驚かせちゃってごめん。
それと今日はお疲れ様。
テントの位置は寮長室の窓の近くに落ち着いたよ。

それじゃあおやすみなさい。
また明日学園で。

＝＝＝＝＝＝

パタン。
携帯を閉じて少ししてから、携帯から着信音が鳴り響いいた。
ちなみに着メロは「Ｏｖｅｒｔｕｒｅ」というとあるゲームの曲だ。

＝＝＝＝＝＝

ｆｒｏｍ：布仏本音（ほんねさん）

Ｓｕｂ：（、ω、）／~~

本文：
おやすみー（・ω・）

そういえば部屋に帰ったら
かんちゃんが顔真っ赤にし
てたんだけどなにかしって
るー？
聞いても教えてくれないん
だー
しーくんが原因だと、本音
さんは思ってるんだけど、
どうかなー？（＾ω＾）

また明日クラスでねー
おやすみなさい
（・ω・）ノシ

＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝

ｆｒｏｍ：更識簪（かんざしさん）

Ｓｕｂ：おやすみなさい

本文：
その、お疲れ様です。

おやすみなさい。

＝＝＝＝＝＝

パタン。
携帯を閉じたあと、俺は本社への報告書を軽く纏めて送信し寝ることにした。
今日は色々あったが、これがしばらく続くのか……

「……めんどうくせー……」

俺の呟きは誰に聞かれることもなく夜の闇へ消えていくのだった。

１０話（後書き）

若干簪にフラグ立てたかな？という回でした。

現在クラス代表を一夏にするか静和にするか悩んでます。
どちらでも話は進めれるよう考えてはいるので、まあ微々たる差ではあるのですが。
ん～悩む……

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

１１話（前書き）

なんか纏まらず書いては消し、書いては消しの繰り返し。
未だ代表決定戦にならず。
進行速度遅すぎですかね？

11話

どうも、俺こと四季静和です。

色々あったが初日を乗り切り、現在入学式翌日の朝六時。
まずは昨日寝る前に送った報告書についてのメールを確認する。
……うん、問題はないみたいだ。
んで手早く着替え荷物を纏める。
さすがに授業中、テントや荷物をこのままにするのはまずいので、
一度纏めたあとロッカーか職員室に置かせてもらおう。
これをしばらく続けるのか…面倒臭いな…

俺は一度、数少ない男子トイレで身だしなみを整えて……なんかこれだけ聞くと凄い惨めだよな。
いや、実際惨めと言えば惨めか……

とにかくその後一度職員室に荷物を持って移動。預けたあと一年の食堂へ移動した。
まだ7時を少し過ぎたということもあり、食堂にはほとんど人が居なかったが、俺に気付いた数名がヒソヒソを噂話を始めていた。

「ねえ、彼が噂の男子の一人？」

「そうそう。彼、アース・コロニー出身らしいよ」

「あそこって確かMSの開発に力いれてるところだよね？」

「うん」

「あ、そういえば彼って企業代表らしいよっ」

「うそっ！？」

「本当だって。昨日それを聞いた子が居るって話も聞いたよ」

ああ、なんか色々と噂になってるみたいね。
というか、俺は正確には企業代表予備だからね？

そんな話を聞きつつ俺は朝食を受け取った。
ちなみに俺の朝食は洋食セットが２つで、トレーに載ったそれを持ってどこに座ろうか考えていたら、とある席に見知った子がいた。
俺はその子の近くまで行き声をかけた。

「おはよう。簪さん」

「えっ？あ…お、お、おはよう……」

「ここ座ってもいい？」

「…う、うん。だ、大丈夫…」

簪さんは日本食セットだけど量は少なめみたいだ。

「いいな〜」

「あの子誰？」

「確か４組のクラス代表になった子よ」

外野から色々話が聞こえるが、ふむ。

「簪さん、４組のクラス代表になったんだ。おめでとう」

「あ、でも…無理矢理押し付けられたようなものだから。私、日本代表候補生だし。それに……更識で、生徒会長の妹だからって…」

どうやらこの話はしない方がよかったみたいだ。

「ああ、それじゃあ素直に喜べないね」

「……うん」

「…日本代表候補生ってことは、政府から専用機を支給されてると思うけど、それってどんな機体なの？」

「……まだ出来てない……織斑一夏のせいで……」

やばい、完全に地雷だったっぽいな。

おそらく政府側は日本代表候補の簪さんよりも、希少価値の高いサンプルの織斑を優先してる。
その煽りでＩＳ開発にも影響が出ているってとこか。

「だから…自分で作ることにした…

「自分でって、専用機を？一から？」

「コアは渡して貰ったし、基礎部分もある。だから……」

「一人でやる、と……」

コクンと頷く彼女。でもそれってかなり難しい、というか一学生にはキツイと思う。
俺がどうしようか考えていると、食事が終わったのか彼女は「それじゃあ」と一言残し食堂を後にした。
そのすぐあとに俺も食べ終わり、食堂を後にした。

なんか事情があるのか、それともＡＥ社関係の俺が手を出すのがまずいのか。
ん～……どうしよう。

◇◆◇

二時間目が終わった段階で、織斑はグロッキー。
三時間目は追撃と言わんばかりに女子校独特のノリで授業をされる

始末。
…山田先生。俺と織斑がいるの忘れてたみたい。
んで今、三時間目後の休み時間なんだけど、俺と織斑、主に織斑に質問が集中している。
多分話題の降りやすさや、本人たちの興味が多いのは俺よりも織斑の方だっていうのはわかる。
第一に織斑は織斑先生の弟だからな。
織斑先生のファンが多いこの学園では、自然と集中してしまう。
しかもまだ二日目だしね。現に今も…

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」

「え。案外だらしな――」

パアンッ！

あ、叩かれた。

「休み時間は終わりだ。散れ」

多分個人情報というよりは、普段の状態を知られたくなかったんだろうな。
…あの部屋はなあ…

パアンッ！

「お前も失礼なことを考えるな」

「……はい」

なんでわかったんだろう？顔に出てたか？

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「？？？」

織斑は全くわかってないみたいだけど、これが朝、簪さんが言っていたことか。

さらに周りは専用機を持つことを羨ましがっていたりするが、専用機を持つことの重要さやそれによる制限とかわかってるのかな？

まあ、「自分専用」って確かに憧れるけど、実際持つと話は変わるからな。

というか織斑は周りの反応を見てもサッパリらしい。

それを見かねた織斑先生は、ため息混じりにつぶやく。

「織斑。教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているＩＳですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されておりません。現在世界中にあるＩＳ４６７機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が製作したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数異常作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行なっています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間にしか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

「ついでにいうなら、俺もそう言った理由もあって専用機を持ってるわけ。よくいえばテストパイロット、悪く言えばモルモットだ」

この言葉にクラス中が微妙な顔をした。いや、だから悪く言ったらっていったじゃないか？

「四季。もう少し別の言い方はできないのか？」

「いや、ですから悪く言えばって言ったじゃないですか」

それに俺は間違ったことを言ったつもりはない。
専用機を持つっていうのは、そういったことを考えた上で持たなきゃいけない、って俺は考えてる。
他に俺の考えを押し付けるつもりはないけど、そういった側面があるのも事実。
俺もＩＳに乗るのはデータ収集が本来の目的なわけだ。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

女子が一人おずおずと織斑先生に質問する。うん、その予想は当たりだ。
彼女、篠ノ之箒は篠ノ之博士の実の妹だ。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

……いや、先生。博士の妹って公言すると色々まずいんじゃ？
調べれば判ることだけど、だからって簡単にバラすのもどうかと思いますよ。

しかし篠ノ之博士は何を思ってＩＳを作ったのかな？
まあ、天災の考えることなんて俺には理解できん。
んで作った結果世界を混乱させ、そして自身は雲隠れ。
隠れないといけない理由はわかるけど、だけど自分がした結果なら責任持てよ。
そんなことを考えていると、篠ノ之さんが博士の関係者ということ

が起爆剤となり、クラスはどんどんヒートアップしていった。

「えええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ＩＳの操縦教えてよっ」

皆授業中ってこと忘れてない？というか二人ってことは俺は含まれていないのか。

一応俺の父さん、四季学都はＭＳ会じゃ権威っというか第一人者なんだけど…

俺の発表のとき公表してないから意外と知らない？もしくはＭＳのことだから女子は興味がないのか？

どうでもいいや、そう考えた瞬間だった。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。俺は驚いて声のする方を向くと篠ノ之さんが席を立ち拳を強く握っていた。

クラスの女子は何が起こったか全くわかっていない様子だった。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って、篠ノ之さんは窓の外に顔を向けてしまった。
女子は盛り上がったところに冷水を浴びせられた気分のようで、それぞれ困惑や不快を顔にしていた。
まあ本人の気持ちを考えるとわからないでもかいな。
俺もアース・コロニーでは似たような経験があるからな。
俺の場合は父さんを馬鹿にしつつも尊敬してたから別に苦じゃなかったけど、あの反応、姉妹仲はよくないのか？

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

山田先生の号令で授業は開始された。俺にとっては復習なんだけどね…

◇◇◇

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

授業後、早速金髪の少女は学園に二人しかいない男子の下へ向かい、ポーズを取りながらそういった。

「そちらの方も、専用機持ちのようですがどうやら第二世代型。一応勝負は見えていますが、さすがにフェアではありませんものね」

「？なんで？」

「俺はむしろ訓練機の方がいいと思うんだけどな。というかだ、オルコット」

「な、なんですの？」

「お互いに訓練機の方が実力を見やすい。専用機なんて自分が扱いやすくて当然なんだ。代表候補生が素人に専用機を使う、実力がないのか圧倒的勝利をえて悦に浸りたいのか…」

「……馬鹿にしていますの？」

「そんなつもりはない。ただ思ったことを言っただけだ」

「それを一般的に馬鹿にしていると言うのでしょう！？」

ババン！

セシリアが机を叩くことによって、静和の机の上のノートが落ちる。それにより静和の機嫌は若干悪くなる。

「……オルコット」

「なんでしょう？」

「自慢や優越感を得ること以外に用がないならもう話さなくていい」

「なっ！」

「織斑はどうかしらんが、俺は訓練機だろうと自分の機体だろうとお前に勝つ。それだけだ」

「……そうですかっ！では当日を楽しみにしていますわ！クラス代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということを教えて差し上げますわ」

ぱさっと髪を手で払ってきていに回ったあと、セシリアはそのまま立ち去っていった。

「そうだ、箒」

「……」

「篠ノ之さん、飯食いにいこうぜ」

一夏は先程の授業で箒が妙に浮いていしまったため、フォローのつもりで食事に誘うが、箒は話を聞いてないというよりは無視している様子だ。
フォローのためもあり一夏はクラスメイトにも話をふる。

「他に誰か一緒に行かない？静和も行こうぜ」

「…ああ、まあいいぞ」

静和を誘えば多分もっと人は来る、そう思った一夏は彼を誘い、それをなんとなく察した静和もそれに答えるのだった。
その結果…

「はいはいはいっ！」

「行くよー。ちょっと待ってー」

「お弁当作ってきてるけど行きます！」

入れ食い状態である。この結果に一夏は満足だったが、箒の様子はやはり良くはなかった。

「……私は、いい」

「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいっ。私は行かないと――う、腕を組むなっ！」

いきなり腕を組まれたことにより箒は動揺した。
一夏はこういった行動で強引になんとかできると思っていた。

「なんだよ歩きたくないのか？おんぶしてやろうか？」

「なっ……！」

この言葉には箒もボッっと顔を赤くした。こう言われれば嫌でもついてくる。
一夏はそう考えていたがそれは違った。

「は、離せっ！」

「学食についたらな」

「い、今離せ！ええいっ――」

嫌がっていた箒は絡まされていた一夏の腕を、肘を中心に曲げ人間の反射を利用しそのまま背中から投げた。

「―織斑っ！」

ドスン

「……」

「いってて…静和、だ、大丈夫か？」

「……大丈夫だ、問題ない……」

一夏が叩きつけられる瞬間、それを察した静和が一夏と床の間に入ることでクッションの役割を果たした。
しかし衝撃は完全に殺されたわけでなく、さらにクッションとなった静和はそれなりにダメージをおっていた。
静和はそれを顔や行動には出さないが、それでも痛いらく言葉が弱々しい。
この光景をみた周囲の女子はぽかんとしていた。

「箒、腕あげたなぁ」

「ふ、ふん。お前が弱くなったのではないか？こんなものは剣術のおまけだ」

流派にもよるが、剣術を習熟する過程で古武術を習得する流派もある。
それでも「ついで」で覚えれるほど簡単ではない。
つまり「ついで」で習得してしまうこの少女のセンスの良さはだけは伺える。

「え、えーと……」

「私たちやっぱり……」

「え、遠慮しておくね……」

この一連の流れを見た周りの少女たちは蜘蛛の子を散らすように退散していった。
それもそうだ、いきなり男を投げ飛ばす光景を見れば誰だって驚く。
クラスに微妙な空気が流れる。箒は「私は悪くないぞ」と言いたげに、腕を組んで一夏から目をそらしていた。
そんな中、起き上がった静和と一夏は顔を見合わせたあと頷き、そして一夏は箒の方を向いた。

「箒」

「な、名前で呼ぶなと……」

「飯食いに行くぞ」

「お、おいっ。いい加減に――」

「黙ってついてこい」

一夏は箒の腕を強引に掴み、それでも抵抗しようとする箒を無理やり連れて教室を後にした。
二人が去ったあとの教室には、そんな二人をみて呆気にとられている女子と、「面倒臭い」とため息を吐いている静和が残された。

「ああ、さっき飯食いに行こうって言った子、布仏さんと谷本さん

と鏡さん、だっけ？織斑達は放っておいて、一緒に行くか？」

静和の発言で教室は瞬時に停止した。

「「「いくっ！」」」

「私も言っとけばよかったー」

「まだ、まだ二日目。焦ることはないわ」

数秒後、三人の重なった返事と、悔しがる他の女子たちの後悔の声が教室に響いた。

◇◇◇

「ねーねー、しーくん」

「なに？」

「しーくん、背中大丈夫？」

「そうそう、さっき織斑くんの下敷きになったよね」

「怪我とかない？」

ちょうど食堂に着いた時、三人はさっき俺が下敷きになったことの心配をしてくれた。
あ、ちなみに俺と本音さんが知り合いっていうのは移動中、谷本さんと鏡さんに詳しいことまでは言ってないけど、親同士が知り合いで最近お互いに知り合ったってことを説明した。
だから本音さんは今、俺のことを「しーくん」と呼んでいるわけだ。

「ああ大丈夫。そんなにヤワな鍛え方してないしね。心配してくれてありがとう」

「それならいいけど…」

三人にまだ少し心配の色が見て取れる。
キャリーさんの訓練や自主トレーニングもあって、そこそこ体力と丈夫さには自信はあるんだよな。

「それより、飯。何にするの？」

「ん～、私はペペロンチーノかな」

「私は天どーん」

「私はお弁当だから。四季くんは何にするの？」

「俺は、そうだな…かつ丼とシーザーサラダの大盛り、あと野菜炒めにしようかな」

「えっ？一人でそれだけ食べるの？」

鏡さんは俺の食べる量に驚いているが俺からすれば普通だ。
そもそも身体を動かすことが多いし、俺自身燃費が良くないから食べないと動けない。

「俺としては普通なんだけどね」

それは皆食事を受け取り、席を探そうとした時だった。

「結構です。私が教えることになってますので」

そんなに大声というわけじゃないが、よく通る篠ノ之さんの声が聞こえた。
声のした方を向くとそこには食事中の織斑と篠ノ之さん、そしてリボンの色からして三年生であろう女子がいた。

「四季くん。あれって……」

「……」

「あなたも一年でしょ？私の方がうまく教えられると思うなぁ」

「……私は、篠ノ之束の妹ですから」

篠ノ之さんは嫌そうな顔をしながらもそう言う。
さっきの教室のやりとりを考えると、博士のことをあまり良く思ってない感じだったけど、なんで博士の名前を出したんだ？
いや、考える必要もないか…

「篠ノ之って――ええ！？」

そう、本人がどう思おうと周りは篠ノ之博士の妹というだけで、少なからず特別な人間だと思ってしまう。
それこそ天災の妹は天才だと……
どうやらその効果はあったらしく、三年の先輩は驚いていた。

「ですので、結構です」

「そ、そう。それなら仕方ないわね……」

なんというか三年の先輩が少し可哀そうに思える。
たしか篠ノ之さんのＩＳ稼働時間って、普通の一般生徒と変わらないはず。
予想だけど、ＩＳの知識も大差ないはず。

「……ああ、俺たちもさっさと食べよう。時間ももったいないしさ」

「う、うん。そうだね」

色々あって昼休みも残り少ない、さっさと食べないと午後の授業に遅れてしまう。

「今日の放課後、剣道場に来い。一度、腕がなまってないか見てやる」

「いや、俺はＩＳのことを――」

「見てやる」

「……わかったよ」

……剣道場？ＩＳのことは？
たしかにＩＳは感覚っで動かす部分もあるけど、知識として最低限知っておいた方がいいこともあるんだが。
織斑の場合はその最低限すらないから、感覚の方を優先するのか？

「……あっ」

「どうーしたのー？」

「織斑にＩＳについて教えないといけないんだった」

「そういえば、織斑先生とそんな約束してたね」
「俺も放課後、剣道場に顔出すか…」
「あ、じゃあ私も一緒に行っていい？」
「私もー」
「んじゃ四人で行くか？」
「オッケーイっ」
ん～まあ織斑の実力もわかるしいいか。
この後俺達四人は他愛ない会話をしつつ昼食をとるのだった。

11話（後書き）

本音、谷本、鏡が放課後剣道場に行く発端を静和に作らせました。
あと本音は勿論ほかの二人とも仲良くさせようと思います。
フラグはどうなるか知りませんが（・∀・）

どうでもいいけど、作者と静和の食事量はほぼ同じ。
……私は太ってませんよ？

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

１２話（前書き）

う～ん、うまく纏まらない。
今回はいつも以上にｇｄｇｄかも。

12話

どうも、俺こと四季静和です。

今俺はエイクスのメンテナンスをするため、ＩＳ整備室へと向かっている。
放課後、剣道場で織斑と篠ノ之さんの練習を見たが、正直見ても意味ないと思い剣道場を後にした。
本音さん達はまだ剣道場にいるはず。
ちなみに放課後、織斑にＩＳのことを教えるというのはクラス代表決定戦が終わるまでしないことにした。
俺は興味ないが一応代表を決める試合だ。
なら公平を保つために織斑に加担するのはやめたほうがいいと判断した。
これはすでに織斑先生に伝えてある。
ただ伝えたあと「本音は？」と聞かれたので「面倒くさいからです」っていったら拳骨くらいました。
いってぇー……

整備室についた俺は、早速エイクスのメンテナンスをするため管理担当に工具と場所の使用申請をしに行った。
申請はすんなり通り場所を何処にしようかと、整備室を見渡すとそこに見知った顔が見えた。

「こんにちわ、簪さん」

「あっ。し、四季くん…こんにちわ」

今俺の目の前には、基礎フレーム以外バラバラの状態広げられたＩＳがある。
たぶんこれが、朝言っていた簪さんの専用機。
フレームを居る限りベースは打鉄。
つまり日本政府は日本製量産機の発展機を作ろうとしていたのか。
たしかに打鉄は第二世代の中でも耐久面ではかなりすごいし、基本装備がブレードとはいえ後付武装で遠距離も対応可能。
下手に新規に第三世代を作るよりも、その技術を使い発展させるのは間違ってはいないよな。

「……あ、あの。四季くんはなんでここに？」

「あ、俺？俺はエイクスのメンテナンスだよ。ちょっと見ておこうと思ってね。隣、大丈夫？」

「大丈夫」

「んじゃ、失礼」

そういって俺はエイクスを展開、そして簪さんの隣のスペースに鎮座させた。
ちなみにエイクスは半年前にバージョンアップさせ、外見が少し変わってる。
変更したのは以下の通り。

・膝の装甲を小型ブースター付きのモノに変更
・胸部装甲の形状を変更、より装甲がなくなった
・上腕部分から肩を覆う形の小型ブースター付きの装甲を追加
・頭部をフルフェイスヘルメットタイプから目元から上を覆う形のバイザータイプに変更
・補助ＡＩを追加
・武装諸々追加

こんなところだな。

「これが…ＡＥ社の、四季くんの専用機…」

「そういえば簪さんは資料でしか知らないんだったっけ？」

「うん……」

「変わってるだろ？正直、一般的なＩＳとはかなり違う外見だし、ＭＳの技術も使ってるからね」

「ＭＳの技術を？」

「そ、データ見る？」

専用端末、ようは俺用のノートＰＣみたいなもんだね、それをエイクスと繋げ見せても大丈夫なデータを簪さんに見せる。

「これはエイクスとＡＥ社防衛用のＭＳにしか使ってないんだけど、

MC(マッスルケーブル)って言われてる特殊伸縮ケーブル」

「…こっちは？」

「ああ、これはね――――」

このあと俺は簪さんの質問に答えつつ、エイクスの簡易メンテナンスをした。

少しでも参考になればいいけど、さすがにこいつ(エイクス)は特殊だし武装ぐらいしか参考にならない。

食堂の時間もやばくなりそうなので、俺と簪さんは片付けをしたあと整備室をあとにした。

◇◇◇

ＩＳ整備室に四季くんが来たときはびっくりしたけど理由を聞くと納得した。

最初、少し嫌な気分になった。

だって私は専用機が出来ていない、彼はすでに持っている。

―自分の専用機を見せつけている

彼にそのつもりがなくても、私はそう思ってしまった。

それが少し嫌になったけど、彼のＩＳ、エイクスの外見とデータ見て私は驚いた。

―あまりにも極端過ぎる

データは自体は護衛をする、ということが決まった段階でもらっていた。
でも実際に見ると驚きしかなかった。
大容量拡張領域はあるが、基本武装がないどころか装甲も削られている。
そしてＩＳにＭＳの技術を利用していること、これが一番驚いた。
それが珍しく、私はついつい四季くんに質問ばかりしてしまった。
おかげで打鉄二式（うちがねにしき）の参考になったけど、四季くんには悪いことをしちゃった。

整備室をあとにした私たちは食堂に行って夕食を一緒に食べた。
四季くんは相変わらず凄い量を食べていた。

◇◇◇

夕食後、簪さんと食堂で別れたあと、俺は一度職員室に荷物を取りに行った。
まだ残っていた山田先生と鉢合わせになり、部屋割りのことで謝られた。
どうやら一年の部屋割りを主に担当していたのが山田先生だったらしい。

昨日と同じで織斑にシャワーを借りにいったら、今日は篠ノ之さんもいた。
事情を説明しなんとか借りることの了承は得た。
ただあまり良い顔はしてなかったけど……

寝床は昨日と一緒で寮長室のベランダ前の木の下、ここにテントを張る。
テントの中で報告書を送信したあと今日はすぐに寝ることにした。

◇◆◇

翌日の放課後、今日も俺はＩＳ整備室にいる。
あ、織斑は今日も剣道場で訓練らしい。
俺は展開した武装を点検しながら、横で黙々と作業をしている簪さんをみた。
彼女は凄まじいスピードでキーボードを打ちながら、空間投影ディスプレイに表示されている打鉄二式のデータを確認している。

「……どうしたの？」

「あ、いや。すごいなーと思って」

どうやら俺の視線に気づいていたみたいだ。

「…わ、私は別にすごくない…。一人でＩＳも完成させれていないし、他のことだって…」

「それってお姉さんと比べてってこと？」

「……」

どうやら楯無さんと比較してるみたいだ。
たしかにこの学園にいると、どうしても生徒会長である姉と比較されちゃうんだろうね。
実際この三日の間に、俺も生徒会長の噂は耳にしてる。
そしてその妹が1年にいる、ということも。

「簪さんはなんで一人で自分のＩＳを組み上げたいの？」

「…それは、姉が一人で組み上げたから…」

「楯無さんは一人で組み上げた。だから自分も一人で組み立てる。そういうこと？」

「……うん」

比較されるのは嫌、でもどうしても周りからの声が耳に入ってしまう。
優秀な姉を持つが故の苦悩、か。
正直わからないわけじゃないけどな……

「簪さん。楯無さんと比較してるみたいだけど、それを気にしないで済む方法があるとしたらどうする？」

「え？」

「簡単だよ。楯無さんと比較されない分野に進めばいいんだ。もしくは更識楯無の名前が及ばないところへ行くか、だね」

「……」

比較されるならされないようにすればいい。
完全には無理だが、違う分野に進めば比較されることも少なくなる。
というか比較しようがないしね。
んでもう一つの方は現実的ではない。
情報世界のこのご時世、国家代表である楯無さんの名前が及ばないところなんて少ない。
ないわけじゃないけど、それこそ人との関わりが希薄になる。

「……でも簪さんは比較されてしまうこの場、ＩＳ学園にいる。それはなぜ？日本代表候補生だからってだけじゃないでしょ？詳しことはわからないけど、それでもいるのには理由があるんじゃないかな？」

「……」

俺の言葉に簪さんは俯いてしまった。

「俺もね、父さんと比べられることがあるんだ。いや、正確には、何をしても『さすが四季学都の息子だ』って言われるんだ」

「……」

「さすがに最近はそうでもないけど、前は結構、ね。父さんはＭＳの権威だし、やっぱり二世である俺に周りの大人は期待するみたい。この子なら何かやってくれるんじゃ？ってね」

正直辛かった。何をしても俺が評価されている感じがしなかったからな。

「でもね、俺は俺。父さんは父さんって考えることにしたんだ。そうしたらね、少しは楽になった」

「…でもそれじゃあ――」

「ああ、根本的な解決にはならない。俺の場合はそれでよかった。けど簪さんの場合は違うかもしれない。というか、簪さんは気にしすぎっ！」

「えっ？」

驚いた簪さんが顔を上げて俺を見る。

「楯無さんは確かにすごいかもしれない。これは事実だ」

「……」

「でもっ！俺からすれば簪さんだって十分すごいっ」

「わ、私なんて全然――」

「すごいって。むしろそのタイピング速度がすごくないとか言われたら、俺って何？ってなるんだけど」

「こ、これは慣れで……」

「慣れだとしてもすごいよ。そんだけのスピードでタイピング出来る人は俺の周りに居ないかも。自信もっていいよ」

「あ、あう……」

いきなり褒めたもんだから、簪さんが慌て始めた。

「それにさ、少なくとも俺は。俺は簪さんを『更識楯無の妹』として見たことは一度もない。簪さんは簪さん。楯無さんは楯無さん。俺はそうみてる。それに……」

「そ、それに……？」

「本音さん。彼女は確かに布仏家として更識家に仕えているのかもしれない。でも彼女は君を『更識簪』一個人として見えていると思うよ？」

「……」

どうやら今までのことを思い出しているようだ。
俺から見たら簪さんと本音さんの関係は完全に幼馴染の友人だからな。
主従関係があるなんておもえないよ。

「でさ、一人の友人として簪さんに言いたいことがある」

「な、なに？」

「更識簪になれるのは更識簪だけだ」

「それって……」

「あ、あとこれ」

「えっ？」

エイクスを待機状態にして立ち上がった俺は、ポケットからＵＣＢメモリーを取り出し、簪さんに投げ渡した。

「よかったら参考にして。それじゃあお疲れ様」

簪さんに手を振り、俺は整備室を後にした。

◇◇◇

「……これはっ！」

私は渡されたＵＳＢのデータを見て驚かずにいられなかった。
中身はＡＥ社が販売しているＩＳの武装設計図だった。
ハンドガンやアサルトライフルなんかの銃器類、ミサイルポッド、
さらにＢＴ兵器なんかもいくつかあった。
このデータがあれば武装はなんとかなる。
でもなんでこのデータを……

いくつかデータを見ていると、一つ「必読」と名前がついたフォルダが目についた。
その中のテキストデータにはこう書かれてあった。

―もしよかったらこのデータを参考にでもしてくれ。
本社からはちゃんと許可をとってるけど、あまり他の人に見せないでね？

簪さんは簪さんだ。他の誰でもない。気楽に行こう―

私は私、か……
私はふと、さっきまで彼がいたスペースをみて――

「……ありがとう……」

自然とこの言葉が出てきた。
自分でもなんで言ったのかよくわからない。
わからないけど言わなきゃいけない気がした。
そのあと私は本音が呼びに来るまでずっと作業を続けた。

……食堂、終わっちゃった……

◇◇◇

さくっと翌週の月曜の放課後。

とうとう代表者決定戦の日となった。
あの日以降、俺はずっとアリーナでＩＳの練習をしていた。
といっても基本的な機動とオープン＆ａｍｐ；クローズ、あと的当ての簡単なものだけどね。

俺、織斑、オルコットの三人はＩＳスーツに着替え、アリーナの中央に集まっている。
しばらくして織斑先生が俺達の下にきた。

「三人とも集まっているな？では今から順番を決めるくじを引いてもらう。織斑から順に引け」

「「「はい」」」

織斑、オルコット、俺の順で引いた結果――

「お、よっしゃ、一だ」

「二、ですわね」

「……三です」

「では初戦は、織斑対オルコット。15分の休憩後、オルコット対四季。再度15分の休憩後、織斑対四季。以上の順番だ」

「ひとつ質問があります」

「なんだ」

「他二名が対戦中、待機者の観戦の是非はどうなんでしょう？」

情報はあればそれだけ有利になる。
つまり最初の二人、特にオルコットは不利になってしまうので一応聞いておかないと。

「そうだな、公平を保つため待機の者はピットにて待機。モニター等で情報を得ることも禁止する」

「了解です」

「それと織斑。先ほどお前の機体が届いた」

「本当ですかっ」

話には聞いてたけど、まさかこんなギリギリで来るとは。

「では織斑とオルコットはすぐに開始できるよう準備を、四季はピットに待機しておけ」

「「「はいっ」」」

さぁて、代表予備の意地と実力、そしてエイクスの力。
皆に見せてあげようじゃないか。

１２話（後書き）

エイクス、一度も戦闘描写がなくバージョンチェンジｗ
そして次回、ようやくＩＳ戦に突入です。
……長かった……

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

13話（前書き）

ようやくバトル回！
といっても前半は原作を作者視点＋αで再構成したものですが…

13話

クラス代表決定戦、第一試合。

公式で世界初、そして学園に二人しか居ない男子の一人、織斑一夏。オルコット家の令嬢にしてイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの試合が今始まろうとしていた。

このあとに控えているもう一人の男子、四季静和も参加するということもあり、現在アリーナは1年1組のみならず、他クラス、他学年からも観覧者が押しかけていた。

ある者は好奇心で、ある者は応援に、ある者は調査に……

様々な理由はあれど、今この第3アリーナの熱気は、もはやクラス代表を決めるためという範疇を超えていた。

そして今、アリーナの中央付近ではイギリスの第三世代蒼い雫（ブルー・ティアーズ）を纏ったセシリア・オルコットと、日本の第三世代白式（びゃくしき）を纏った織斑一夏がお互いに向き合っていた。

「逃げずによく来ましたわね」

セシリアは鼻をふふんと鳴らす。

腰に手を当てポーズまでとっていることからして余裕があるのだろう。

対して一夏は、ただじっと相手を見据えていた。

「最後のチャンスをあげますわ」

腰に当てた手を一夏の方に、ぴしっと人佐志生日を突き出した状態で向ける。
左手に持つ二メートルを超す長大な銃、六七口径特殊レーザーライフル＜スターライトｍｋ？＞は、余裕なのかまだ砲口が下がったままだ。

「チャンスって？」

「あなたとの試合、わたくしが一方的に勝利を得るのは自明の理。惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝れば、まあ許してあげないこともなくってよ」

そう言いつつもセシリアは射撃モードへと移行。セーフティロックを解除する。
一夏はセシリアの放つ空気と、初めて騎る白式に飲まれないように集中していた。

「そういうのはな、チャンスって言わないんだよ」

「そう…残念ですわ。それなら――」

セシリアは射撃体制に移行。トリガーに指を構え初弾エネルギーを装填。

「お別れですわね！」

その言葉と共に独特の音を発し、同時に走った閃光が一夏の体を撃ち抜いた。

「うおっ！？」

白式のオートガードで直撃は避けたものの、成形途中だった左肩の装甲の一部が、今の一撃で吹き飛ぶ。
そして、男のＩＳ操縦者対代表候補生の試合が幕を開けた。

◇◆◇

試合開始から二十七分、一夏は追い詰められていた。

同じ第三世代といっても差は出てきてしまう。
そもそも武器が接近用ブレード一つで、尚且つＩＳ操縦が二回目の一夏が、代表候補性であり遠距離戦主体のセシリアにこれだけもっているのだ。
褒められこそすれ罵倒されることはないだろう。
観客は最初こそ、もしや一夏が勝つのでは？と思っていたが、やはり地力の差は出てしまう。
今では一夏はもう負け、次の試合はどちらが勝つのか？などと賭け

をし始めた者も出てきている。
しかし諦めていないものがいた。
誰であろう、今戦闘中の一夏本人である。
スターライトｍｋ？の正確な射撃、そしてビット（ブルー・ティアーズ）による回避困難な多角攻撃。
これらを受け、そして時には回避し、少しずつ。少しずつではあるが、セシリアの癖を見つけ始めた。
本人の才能もあるのかもしれないが、原因の半分は演説混じりに戦闘をしていたセシリアにあった。
そのため一夏は、本人の意思とは関係なく情報を得ていた。

「では、そろそろ閉幕（フィナーレ）と参りましょう」

セシリアは笑みとともに右腕を横にかざし、ビットに命令を送る。
命令を受けたビット二機が多角的な直線機動で一夏に向けて接近する。

「くっ……」

一夏の上下からビットによって放たれるレーザーをギリギリで回避。
しかしそれによって出来た隙をセシリアのライフルが狙い撃つ。
先程からこのパターンでのダメージ蓄積が多くなっていた。
今度の狙いは装甲を失っている左足。
もしここにダメージを受ければ、絶対防御が発動しＳＥ（シールドエネルギー）は零になり一夏の負けになる。
たとえ別の部分に当たったとしても状況は好転しない。

ならばと一夏は賭けに出た。

「ぜあああっ！！」

無理矢理加速し、一夏は体ごとセシリアのもつライフルの銃身に正面から衝突。
その衝撃で砲口が逸れ、なんとか一撃を免れた。

「なっ…！？無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ！」

一瞬驚いたがセシリアはすぐに距離を取り、空いている方の左手を横に振る。
すると、それまで周囲で待機していたビットが一夏の方へ向かって飛んでいった。

（…そうか、わかったぞ）

一夏は一連の動作と今までのことを思い出し、ある考えに行き着いた。
それを確かめるべく、放たれたレーザーへと向い、それをくぐり抜けすれ違いざまに一閃。
斬撃を受けたビットは真っ二つにされ、その一秒後青い稲妻を走らせ爆散した。

「なんですって！？」

驚愕するセシリアとは対照的に、一夏は勝機を見出した。
一夏は上段打突の構えで切り込むが、セシリアはそれを後方へ回避し、また右手を振るう。
それに答えるように二つのビットが一夏へと飛んでいく。

「このビットは毎回お前が命令を送らないと動かない！しかも――」

その軌道を先読みし、一つのビット後部の推進部を斬り、行動不能にした。

「その時、お前はそれ以外の攻撃をできない。制御にでも意識を集中させているからだ。違うか？」

「……！」

セシリアの右目がわずかに動くのを一夏は見逃さなかった。
事実、現在のセシリアではビットを操作するのに意識を集中させなければならず、その結果ほかの行動、特に攻撃ができなくなってしまう。
さらに一夏はもう一つの事実にも気づいていた。

（あのビットは毎回俺の死角。反応が一番遠い角度を狙ってくる）

ＩＳの全方位視覚接続は完璧だ。しかし、それを扱うのは所詮人間。

真後ろや真上、真下などは直接的に『見る』ことはできなず、情報として送られてきてもどうしても一度頭で整理しなければならない。その整理の時間、コンマ数秒だが、その遅れは隙になる。

（そしてその隙を俺自身が自然と作れば、そこに必ず攻撃がくる。そして俺はそれを待ち伏せするだけ。……あとは集中するだけだっ）

一夏は右腕の刀を握り直す。
箒との放課後訓練が意外なところで生きてきた。

（なんにしても、距離を詰めればこっちが優位だ）

確かに一夏は集中していた。
集中していたが、突破口を見出した一夏は自身では気付かないうちに油断もしていた。

（―獲った！）

間合いを一気に詰めた一夏は、振り下ろした刀で三つ目のビットを破壊。
そのままＩＳ特有の無重力機動で最後のビットに回し蹴りをいて吹き飛ばした。
ライフルの砲口が向くのは間に合わない。
確実に一撃が入るタイミングだった。

「――かかりましたわ」

にやり、と。セシリアが笑う。

その表情をみた一夏は本能的に”まずい”と感じたが、もはや間に合わなかった。
笑みと同時に、セシリアの腰部から広がるスカート状アーマーに取り付けられたパーツが外れ、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

既に回避は間に合わない。
そして二つのビットから発射されたのは、レーザーではなく「ミサイル」だった。

激しい爆音。赤を超え白い、その爆発と光に一夏は包まれた。
この光景で観客席にいる誰もが、そして一夏側のピットにいる箒と真耶でさえ一夏の敗北だと感じた。
しかし、一人だけ。実の姉である千冬だけは違った。
モニターに移された黒煙。
それが晴れたとき、千冬は鼻を鳴らした。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

わずかに漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされた。
そしてその中心には、白式がいた。
そう、真の姿で――――。

◇◆◇

結果から言えば一夏は敗北した。
一次移行（ファースト・シフト）によって、真の姿、能力を扱えるようになったが、その能力が曲者だった。

―単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）、零落白夜（れいらくびゃくや）

エネルギー性質のモノならば、なんであれ無効化・消失させることのできる能力。
これが白式に備わっていた。しかしこの能力には欠点があった。
それは、発動させるには自身のＳＥを消費しなければならないということ。
エネルギー性質のもの、相手のＳＥすら削り取るそれは、自身のＳＥを犠牲にする諸刃の剣だった。
それを一夏はボロボロの状態で使用したのだ。
そうなればどうなるか？
結果、セシリアに刃が届く寸前でＳＥが零になり、一夏は自滅した。
ピットに戻った一夏に待っていたのは、「大馬鹿者」という嬉しくないランクアップと、電話帳のごとき厚さのルールブックだった。

そして、十五分の休憩後。
第二試合、セシリア対静和の対戦が始まろうとしていた。

◇◇◇

エイクスを纏った俺は、アリーナ中央で待機していた。
話によれば織斑は負けたとか。まあ、それはいい。
しかし――

「なんだ、この人の多さは？」

明らかに観客の量が、クラス代表を決めるって内容と見合ってないだろ。
虚さんから「ごめんなさい。お嬢様を止められませんでした」って内容のメールが来てたから何となく予想はしてたけどさ。
それでもこれは多いだろ？

……ちょっと戦い方変えようかな。

そんなことを考えていると、ピットからオルコットが出てきた。
見ると何やら様子がおかしい。
頬は赤く染まっているし、何かずっと呟いていて「心ここに在らず」と、いう風に見える。

「……ちか……」

「ん……？」

聴覚センサーの感度を上げ、声を拾ってみると――

「…織斑、一夏……もっと、もっと知りたい……あの方こそ…」

「……」

な、なんだ？一体さっきの試合で何があったんだ？

もしかして……

オルコットは典型的な女尊男卑

←

織斑負けたとはいえ、予想以上に善戦

←

何か言った、もしくはその姿で示した

←

それが今までの男性像と違った

←

思春期の女子に直撃

←

結果、惚れた？

……まさか、な……

「ああ…オルコットっ！」

「……ひゃ、ひゃいっ！」

「……時間だ。面倒だが始めよう」

「え、あ。わ、わかっていますわっ！」

「そうか……」

「このセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの実力。あなたに見せてあげますわっ！」

「そりゃ楽しみだ」

『警告。敵ＩＳ射撃体制に移行。トリガー確認。初弾エネルギー装填』

「くらいなさいっ！」

その言葉と同時にオルコットから攻撃が放たれ、それは俺に一直線に向かってきた。

◇◇◇

わたくしの初弾は命中し、本来以上の爆音と黒煙がアリーナに広がった。

おそらく何かしらの防御方法をとった結果だろう。

相手は男とはいえ、仮りにも企業代表の予備。代表候補生よりも格上と思って間違いないだろう。

先程の織斑一夏との試合のように、油断する…わけには……。

「……はっ！？」

しっかりなさい！セシリア・オルコット！
今は目の前の相手に集中するのよ！
首を振り、邪念を振り払い目の前の煙へと視線を向ける。
それと同時に、煙の中から上空へと抜ける一つの影を捉えた。
もちろん今の相手である四季静和だ。
やはり何かしらの防御方法をとったらしく、目立った損傷は見られないしＳＥの減りもない。

「スターライトｍｋ？。なかなかの威力だ」

「お褒めに預り光栄ですわ。では、お礼にもっと凄いものを見せて差し上げますわっ！」

左手を横に振りブルー・ティアーズに指示を出す。
二つは前方から、もう二つは彼の後方に回り攻撃するように。
そして指示を出したあと、すぐにライフルを構え発射。
その後、すぐにわたくし自身も動き回り、ビットに指示を出しつつ相手の様子を見ることにした。
今の一連の攻撃は全て回避された。
わたくしも全てが当たるとは思っていないとはいえ、少なからず当たると思っていた。
何より銃の腕には自信があった。しかし、彼はそれをいとも簡単に回避している。

彼、四季静和のＩＳはＡＥ社製の第二世代。
情報では、大容量の拡張領域を得るために基本武器すら削った、本末転倒といってもおかしくない機体。
さらにＩＳにしてはシルエットが細く、スラスターも小型、非固定ユニットも無い。
武装試験型とはいえ極端すぎないだろうか？

そんなことを考えながら彼に狙いをつけていると、急に両腕をこちらに向けてきた。
何を？と思った瞬間、彼の両手にはショットガンが握られており、それはわたくしへと発泡された。

――バリアー貫通、ダメージ３４。シールドエネルギー残量、５２５。実体ダメージ、レベル低。

回避が間に合わず、攻撃を受けてしまいましたが予想以上にダメージは低く、安堵したわたくしに信じられない報告が耳入ってきた。

――ブルー・ティアーズ、ビット１、２大破。

「なっ！？」

そう、先程の攻撃はわたくしではなく、ブルー・ティアーズを狙ったものだった。
おそらく、その過程でわたくしにダメージを与えるため、ショットガンを選んだのでしょう。
まさか開始数分でブルー・ティアーズを２機落とされるなんて。
これは今一度、認識を改めた方がよさそうですわね。

◇◇◇

「きゃあああああっ！？」

戦闘が開始されて十分が過ぎた頃、その異変は突如起きた。
アリーナ中央付近を通り過ぎようとしたセシリアの左腕と右足の装甲が爆発したのだ。
ただ爆発しただけなら、静和の攻撃と判断できるだろう。
しかし、このとき静和が使用していたのは、威力よりも速射性を重視したサブマシンガンで、尚且つ銃口をセシリアへ向けていなかったのだ。

「な、なんですのっ！？あなた、何をしましたのっ？」

セシリアの疑問は、静和を除くこのアリーナにいる全ての代弁だ。
突如何もない空間が爆発。そしてこの場にいるのは自分と静和のみ。
当然静和が何かしたと思うのは自然だ。

「ああ、確かに何かしたね」

パチンッ！と、静和が指を鳴らす。
するとセシリアの周囲に、直径三センチほどの黒い球体いくつも現

れた。

「こ、これは一体……？」

「これが、トリックの種さ」

再度静和が指を鳴らすと、球体の一つがセシリアの持つスターライトｍｋ２と接触した。
その瞬間、球体は爆発しスターライトｍｋ２も破損し、使用不能状態に陥った。

「…まさか、機雷……？」

「そう、正解だ。ただ正確に言えば『二一式浮遊機雷（にじゅういちしきふゆうきらい）』。隠密性の高い浮遊機雷だ」

「そんなっ！何時設置しましたの？それにハイパーセンサーで感知できないのもおかしいですわっ」

「何時設置したかは考えてみな。あと、何故ハイパーセンサーで感知できなかったっていうのは、そういうモンだからだ」

二一式浮遊機雷に搭載された、隠密性の高いシステム。
これはＭＳ技術を使用したもので、現段階ではまだ技術公開されておらず、ＡＥ社特有の武装と言える。
そして何時、その機雷を展開したか。

この場にいる全ての者が考えるが、肉眼でも確認不可なのだ。
何時展開したかなんてわかる訳がない。ほとんどの者は総結論づいた。

（いったい何時？肉眼でも見えないなら何時でも展開できるはず。でもこの機雷は最初から見えていなかったの？もし展開した直後は見えないなら…いえ、この大きさなら気付かれずに展開することも容易なはず……）

「まだわからないみたいだな」

「……」

「そう睨むな。ならヒントをやろう。……俺とオルコットは、試合開始直後から今までどう動いていた？それがヒントだ」

「どう動いていた、ですって？」

静和とセシリアの動き。このヒントを基に、再度考え始めるが、数名を除き答えにはたどり着けないようだ。
数名の人物、教師でありブリュンヒルデの称号を持つ千冬、ＩＳ学園生徒会長でありロシア代表である楯無、
そして三年生唯一の専用機持ちであり代表候補生のダリル・ケイシー、二年生のもう一人の専用気持ちであり代表候補生のフォルテ・サファイアは答えに行き着くと同時に、それを実行していた静和の腕に驚愕した。

「まだわからないか。ああ、何人か気付いたみたいだけど、他の人

もまだわからないみたいだな」

「……」

セシリアは黙って静和を見据えることしかできなかった。
現在セシリアの周りには多数の浮遊機雷が漂っている。
一つ一つの威力は大したことない。しかしこれだけの数、そして現在のＳＥ残量を考えると、無理矢理突破する行為は愚策としかいえない。
それゆえに、ただ静和を見据え、彼の出す問題の回答を考えていた。

「最後のヒント。俺は試合開始以降、アリーナ中央に寄っていない。そして今、オルコットがいるのはアリーナ中央だ」

「……そういうことですの」

「どうやらわかったみたいだな」

「ええ……」

ようやくセシリアも答えにたどり着き、それと同時に、やはり驚愕することとなった。
浮遊機雷を散布したタイミング。
それは最初にスターライトｍｋ?を、静和が受けた時に発生した黒煙が充満しているなかで散布したのだ。
散布直後、静和はアリーナ中央から移動。セシリアも後を追うように移動し、中央から離れる。

後は静和は中央に寄らないよう移動しつつ攻撃し、セシリアを中央に寄らせないようマシンガンとショットガンで進路を誘導していた。ただこれだけだ。
言うは簡単だが、実行するにはかなりの力量を必要とする。
相手が素人なら、まだは難易度は下がる。だが今回は代表候補生であり、射撃を得意とするセシリアだ。
そのセシリアに不信がられないよう誘導する。これは極めて困難なことだ。
これを平然とやってのける、――実際はそうでもないが、平然としているように見せているだけ――静和の実力に、観戦していた全員が改めて驚愕するのだった。
ちなみに最初、爆発反応装甲を施したシールドで攻撃を受けたため、セシリアの予想以上の爆発となったのだ。

「んじゃ、面倒だからそろそろ終わるか」

「……次は」

「ん？」

「次は負けませんわっ！」

「はっ、上等だっ」

笑みを浮かべた静和は指を鳴らし機雷に命令を伝える。
それを受け取った機雷はセシリアへ衝突、直後セシリアを爆発が包み込む。

このダメージにより絶対防御が発動し、ブルー・ティアーズのＳＥは零となった。

『勝者、四季静和』

アナウンスの直後、アリーナを大歓声が包んだ……ということはなかった。
観戦していた者は、静和の実力を見て言葉もでない。そんな状況だった。
静和は爆発の衝撃で気絶したセシリアの下へ寄った。
現在、彼女のＩＳは既に待機状態になっており、セシリアはＩＳスーツ姿の状態でありその彼女を静和は抱き抱えピットに待機している教員に引き渡そうとしていた。

が、この抱き方がいけなかった。
さすがにセシリアの了承なしに背負うのも気が引けたため、所謂お姫様抱っこの体勢をとった。
そしてこれをみた観客の黄色い悲鳴でアリーナは包まれることとなった。
女性ばかりのＩＳ学園で、在学する学生は皆思春期真っ直中。
……つまりこういうことには敏感というか、必要以上に反応してしまうわけだ。

ちなみにこの光景を見た箒と本音は若干機嫌が悪くなったが、本人は何故イラついているのかわかっていなかった。

セシリアを教員に引き渡したあと、静和は自身に割り当てられたピットへと戻った。
１５分間の休憩後、次は一夏との対戦となっている。
（次は織斑、か。どうしようかな）
静和は一夏との試合を、いかに面倒くさくなく終わらすか考えていた。
これはセシリアとの試合で、策を廻らせ実行に移したため疲れたからである。
まあ、自業自得なのだが……

――そして十五分後

アリーナ中央では、静和と一夏が対峙していた。
観客は学園にいるたった二人の男子が戦うということもあって、かなりヒートアップしていた。
その反面、ほとんどの者は静和の勝利は確実と思っていた。
一夏自身も勝てる見込みは薄いと思っていたが、そう簡単にやられるつもりはなかった。
第二試合中、一夏は白式のデータを可能な限り、休憩時間を含め役４０分間頭に詰め込んでいた。
付け焼刃とはいえ、零落白夜の性質上知らぬことの方が逆に危険だ。

「織斑」
「なんだ？」

雪片弐型を正眼に構え様子を伺う一夏。
対して静和は両手を下げ、自然体でそこに佇んでいた。

「面倒だから、この勝負すぐに終わらせる。んで俺が勝つ」

「そうはいくかよっ。勝つのは俺だ」

一夏の作戦は簡単だ。
長期戦になれば燃費が悪く、また初心者である自分が不利になる。
ならば短期決戦、最初から全力で近づき、そして零落白夜を叩きつける。
ただこれだけ。

「とっとと始めるぞ」

「ああ、じゃあ……いくぜっ！」

その言葉を皮切りに、一夏は静和えと高速で接近する。
このとき一夏が行なった行為は、瞬時加速（イグニッション・ブースト）のそれに近かった。
劣化瞬時加速、とでも言えばいいのだろうか？
本家ほどではないにしろかなりの速度を出していた。
これにはさすがに静和も驚きはしたものの、直ぐ様対応。
零落白夜を発動させた上段からの斬撃を、短距離加速（ショート・ブースト）で一夏の右側に回避。

そして雪片弐型を蹴り飛ばし、瞬時に展開したショットガンを至近距離で数発発射したあと、一夏を蹴り飛ばし距離を開いた。
一連の行動は、ほんの数秒の間に行われ観客のほとんど、特に一年生は何が起こったか理解できたものは少なかった。

「ちくしょう……っ」

「甘いんだよ。たしかに考えや筋はいい。でも馬鹿正直すぎるんだ」

静和は左手にアサルトライフルを展開し一夏を追撃。
一夏はなんとか回避しようとするも、動きを詠まれ、そして制限され少しずつＳＥを削られていった。

（雪片を回収しようにも、こう妨害されたら難しいぞ）

何度か雪片弐型を回収しようと試みるも、その都度静和の攻撃により妨害され近づくことさえままならない状況である。

「よし。次で終わりだ」

その直後、静和は瞬時加速を使用し急接近し、短距離加速を織り交ぜ一夏の視界から一時的に消え背後にまわる。
アサルトライフルとショットガンをしまったあと、直ぐ様鎖付きの鉄球を展開。
この鉄球にはいくつものトゲが着いており、さらに鎖との接続部分付近にはブースタが内蔵されていた。

それを振り回し、遠心力で勢いを付ける。
背後に静和がいることに気付いた一夏は、すぐさま振り向こうとするがその瞬間、左脇腹に衝撃が走った。
トゲ付きの鉄球が一夏の左脇腹に直撃したのだ。

「がああっ！」

「これで、ラストーっ！」

掛け声と同時にブースタが点火、鉄球に遠心力＋ブースタの勢いがプラスされ凄まじい威力を生んだ。
あまりの威力に絶対防御が発動し、白式のＳＥは凄まじい勢いで減少、あっという間に零となった。

『勝者、四季静和』

戦闘時間わずか五分未満で、学園男子二人による最初の試合は幕を閉じた。

13話（後書き）

主人公、圧・倒・的・勝・利！

あと気付いたら色んなフラグ立てちゃったかも（ノ∀、）
ダリル先輩とフォルテ先輩を一行だけとはいえフライング登場させました。
この二人ってどこの代表候補生なんだろう？

本編では描写されていませんが、エイクスの基本カラーは灰色となってます。
まさに試作機という色ですね。

最後のハンマー、元ネタわかる人いるかな？
印象は強いけど登場回数が圧倒的に少ないからなあ…

感想、誤字脱字報告お待ちしております。

１４話（前書き）

ちょいと用語集のＭＳのサイズを変更しました。
よくよく考えたら、前のサイズだと小さすぎた（・∀・；）
最近忙しくて更新が遅くなるかもしれませんがチマチマ更新していきます。

今回は少し短め～

１４話

クラス代表決定戦当日の夜。

一夏と静和の試合が終わったあと、しばらくして目を覚ましたセシリアはアリーナを後にし、現在自室でシャワーを浴びていた。
シャワーを浴びながら、セシリアは今日の試合を思い出していた。

（今日の試合――）

第一試合で、何故一夏のＳＥが零になったのかは未だにわからない。
おそらく最後の攻撃が原因なのだろうが、実際どうなのかはわからない。
それに、もし。ｉｆの話だが、最後の一撃を受けていれば、負けたのは自分であった。
セシリアは直感的にあの一撃、零落白夜の一撃の危険性を察していた。

そして今、セシリア自身。どうにも腑に落ちず、スッキリしないことがあり困惑していた。

――織斑一夏、四季静和――

セシリアが困惑する原因を作った男達である。
しかし二人にはそれぞれ違う感情を抱いていた。

まず一夏を思い出す。あの、強い意志の宿った瞳。
他者に媚びることない眼差し。それはセシリアの父親と真逆だった。
セシリアの父親は婿養子ということもあり、常にセシリアの母親の

顔色ばかりをうかがう人物だった。
そんな父親を幼少期から見ていたセシリアは、「将来は情けない男とは結婚しない」と幼いながらに抱いていた。
ＩＳが発表されてから父親の態度は拍車を掛け、母親はそんな父親を疎ましくさえ思っていただろう。
元々我が強く、女尊男卑になる以前から女でありながらいくつも会社を経営し、成功を収めていた。
厳しくもあたが、同時に憧れの人だった。

だがそんな両親も三年前の事故で他界。
その日たまたま一緒に行動していた両親。
その両親が乗った鉄道が原因不明の大事故を起こした。
死傷者数は百人を超え、その中にセシリアの両親もいた。

そしてそのあと彼女に残されたのは莫大な遺産と、それを付け狙う金の亡者たちであった。
遺産を守るため、セシリアは必死であらゆる勉強をし、その一環で受けたＩＳ適正テストでＡ＋という判定が出た。
政府から国籍保持や両親の遺産を守るための、様々な好条件が提出された。
遺産を守るため即決したセシリアは、努力の末代表候補生となり、第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜された。
稼働データと戦闘経験を得るため日本にやってき、そして織斑一夏に出会ってしまった。
あの強い瞳、理想の瞳を持つ男と。

「織斑、一夏……」

静和との試合前もそうだ。この名を口にすると、不思議と胸が熱くなる。
どうしようもなくドキドキし、自然と自身の唇をそっとなでる。
すると形のいい唇は、まるで触られることを望んでいたような不思議な興奮を生み出した。

熱いのに甘く、そして切ないのに嬉しい。

意識すると途端に胸をいっぱいにする、この感情の奔流。

その正体を。その向こう側にあるものを。

――もっと。もっと知りたい。一夏の、ことを。

そう思った時、ふともう一人の男のことを思い出した。

四季静香。一夏とは違い、バイザーを付けていたため瞳の強さは伺えなかった。
だが、彼の実力は間違いなく本物。代表候補生であり、専用機を持つことを許された自分をも圧倒するその実力。
静和の機体には、攻撃方法にこれといった特徴があるわけではない。
ブルー・ティアーズのような多角攻撃、白式のような接近戦特化。
代わりに、静和は多彩な武装を的確に運用し、戦術を立て、それを実行する。
確かに武器が多いことは強みでもあるが、その分各武器に当てられる習得時間は少なくなってしまう。

しかし、それを感じさせない腕。おそらく、いや確実に、自分よりもＩＳの稼働時間は上。

セシリアはそう思った。セシリアのＩＳ稼働時間は４００時間強。これは一般的な代表候補生のＩＳ稼働時間が３００時間ということを考えれば十分に多い。

――男なのにＩＳについて自分以上の努力をしている。

このときセシリアは、静和に対して母親に対する感情に近いモノを感じた。

――尊敬と憧れ。

彼を追えば、彼と共に切磋琢磨すれば自分はもっと高みに登れるのではないか？

そしていつか彼を超える。目標であり好敵手（ライバル）。

それが静和に対する感情だった。

◇◇◇

翌朝のＳＨＲ。面白いことが起こっていた。

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

山田先生は喜々として喋っていて、クラスの女子も大いに盛り上がっている。

疑問の顔をしているのは織斑だけ。そう、織斑だけだ。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺、昨日の試合は全敗だったんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？代表は全勝してる静和がなるのが普通なんじゃ？」

ま、織斑の疑問もわかる。決定戦を行なったのに、なんで全勝でなく全敗の自分が代表なのか？

「それは――」

「簡単だ。俺が辞退した。そして察するに――」

「わたくしも辞退しましたからですわ！」

俺は座ったままだが、何故かオルコットは立ち上がり、そして腰に手を当てポーズをとっている。

まあそれなりに様になってるからいいけど、いちいちリアクションが大きいな。

しかもテンション高いし、機嫌が良い。昨日試合後、なんかあったか？

「俺の理由は簡単だ。元々クラス対抗戦ってのは、その年の入学した生徒の実力を確かめるもの。つまりその学年の習熟度合いを確かめるものでもある。そんな試合に、予備とはいえ国家代表と同じ企業代表が、本来は学園に入学しなくていい俺が出てなんの意味がある？ま、そんなとこだ」

「それで、本音は？」

「面倒臭いから……あっ」

ゴツ！

「――――――っ！！」

「馬鹿者が。学生が学園の行事を面倒くさいとは何様だ」

つい本音を言ってしまい、織斑先生の出席簿を食らってしまった。
というか先生。音がおかしいですよ！！

「わ、わたくしは、”静和さん”に完敗しましたし、それに彼の最初の意見も最もだと思い辞退しました」

実はＳＨＲ前に、俺とオルコットは織斑先生に話があると、呼ばれていた。
内容はクラス代表について。そこでオルコットにはさっきの理由を

説明してる。
面倒くさいってのは、言ってなかったけど……

「それに今回の発端。わたくしも大人げなかったと反省しまして、静和さんと話し合った結果”一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ。
それにＩＳ操縦には実践が一番。クラス代表になれば、戦いには事欠きませんもの」

何事も実践ってのは、色々身につくもんだからね。
それにしても、オルコットのやつさっき俺と織斑を名前で呼んだな。
クラスの女子達はオルコットの意見に賛成らしい。
他のクラスにはいない男子を代表にしないてはないんだと。

「そ、それでですわね、一夏さん」

コホンと咳払いをし、ポーズを変えるオルコット。
普段とは違い、顎に手を当てているんだが、なんか意味があるのか？

「代表候補生であるわたくしが、ＩＳ操縦を教えて差し上げれば、
それはみるみるうちに成長を遂げ――」

バン！

急に机が叩かれた音がし、そちらを向くと篠ノ之が立ち上がってい

た。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

『私が』を強調してるけど、俺も頼まれてるんだけど。織斑先生から。
面倒だから代わってくれるなら文句ないけどさ。というかだ。
オルコットを睨むな。オルコットも怯んでるじゃないか。
前々から思ってたけど、篠ノ之の織斑に関わることの反応が異常すぎる。

「あら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ之さん。Ａのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！」

ないというか、高ければいいことに変わりはないよ。低くても問題ないけど。
結局は操縦者とＩＳの相性や、習熟度合いだし。ちなみに俺のランクもＣだったりする。

「座れ、馬鹿ども」

まだぎゃあぎゃあと騒いでるオルコットと篠ノ之のに出席簿による一撃。
毎度思うけど、あれってかなり痛いよな。

「それと四季」

「はい？」

「今後お前には、ＩＳの実技授業の補佐をしてもらう。これは決定事項だ。異論は認めん」

「……はっ？」

え？なに？突然過ぎる。俺、そんな話聞いてませんよ。

「すいません。理由を伺ってもいいですか？」

「一つはクラス代表を辞退したことによるペナルティー。あれだけの場で二人に勝ったのに代表でないのはそれなりに問題がある。お前が言っていた理由も最もだが、やはり辞退するには何かしらの罰を負ってもらう。二つ。クラス全体の底上げのためだ。この学園内でも屈指のＩＳ稼働時間と実力を持っている貴様だ。教えることができなくとも、実際に見せたりなどで参考にもできる。これでも私はお前の腕を認めている。それ故、だ。三つ。お前の目的にものため。以上が理由だが問題はあるか？ちなみに、面倒という理由は認めん」

まさか世界最強クラスのＩＳ操縦者に認めてもらえるとは。嬉しいけど素直に喜べない……

「ちなみに補佐の詳しい内容は？」

「私、山田先生と共に実技授業を見てもらう。さらに採点も行なってもらう。採点基準はお前の判断に任せる」

「……一学生に頼む事とは思えませんが、了解しました」

「ではクラス代表は織斑一夏。今後実技授業の補佐に四季静和が着く。依存はないな」

はーいと俺と織斑を除く、クラス全員が一丸となって返事をした。面倒ごとが増えたよ、こんちくしょう。

１４話（後書き）

気づけばお気に入り４００、総合評価１０００突破してました。
皆様ありがとうございます！
特に記念の外伝とか考えてないんですけどね（ノ∀、）

セシリアの静和に対する想いは、本編通り目標やライバルです。
なーので静和を恋愛対象としては見ていません。
圧倒しすぎちゃったからですね。

……静和と本音&簪のやりとりを書きたいけどまだそこまで進まない（ノ∀、）
最低でも授業風景を一回入れてからだからもうちょい先になりそうです。
二人の登場をお待ちの方、もうしばらくお待ちを。

15話（前書き）

軽度とはいえ熱中症になったかもしれない作者です。
皆様気を付けましょう（・∀・；）

15話

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、四季、オルコット。試しに飛んでみせろ」

四月下旬な今日このごろ、俺は今日も鬼教官である千冬姉の授業を真面目に受けていた。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

横を見ると既に静和とセシリアはＩＳを展開していた。
それを見て、慌てて意識を集中する。
ＩＳは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。
静和は左腕、力瘤（ちからこぶ）の辺りにアームバンドとして、セシリアは左耳のイヤーカフスとして、俺は右腕にガントレットとしてある。
……いや、ごめん。俺だけアクセサリーとは言いにくい形状だった。
なんでだろう……俺が男だから防具みたいになってるのか？
そうすると静香も防具にならないとおかしいからやっぱ俺だけ？
なんでだろう……。

「集中しろ」

やばっ、次は叩かれる。
俺は右腕を突き出し、ガントレットを左手で掴む。
色々試したけど、これが一番集中、というかイメージしやすいんだよな。
白式、来い。そう念じると変化がすぐに出た。
右腕から全身を膜が覆う感覚が包み、その一秒後、俺の体を光の粒子が覆いそれがＩＳを形成する。
次の瞬間、俺は白式を装備した状態で地面から十数センチ浮遊していた。
セシリアも同じく浮遊しているけど、静和は普通に地面に立っていた。勿論ＩＳを装備した状態で。
そういえば俺と静和に壊されたセシリアのＩＳのビットは、もう修復されているみたい。
案外早く修復できるんだな。

「よし、飛べ」

言われて二人の行動は早く、急上昇しはるか頭上で静止する。
俺も遅れて後に続くが、飛ぶ感覚がよくわからなく上に飛んだつもりが横に進んだり蛇行しながら、なんとか二人の下までたどり着いた。

『何をやっている。スペック上の出力では白式が一番上だぞ』

通信回線から早速お叱りの言葉。ちなみに急上昇、急降下は昨日習ったばかりだ。

「自分の前方に角錐を展開させるイメージ」が一般的らしいんだけど、感覚としてしかわからん。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がわかりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「コツさえ掴めばあとは簡単だ。そのコツを掴む方法ならいくつかあるが、訊くか？」

「おう、教えてくれ」

飛ぶ感覚があやふやだから、それはぜひ訊きたい。ちなみに俺達は今空を飛びながら話をしている。
俺を静和とセシリアが挟む形で。もし俺が何かあったときにすぐにフォローできるようにこの形なんだと。

「一つ、ＩＳの飛行理論を覚える。反重力力翼と流動波干渉、あとは飛行機なんかの航空力学を覚えるのも手かもな」

「い、いや。それは出来れば勘弁願いたい」

「将来的には覚えたほうがいいんだが、まあお前には合わないだろうな」

確かに覚えたほうがいいのかもしれないけど、さすがにそれを今は無理だ。

俺が苦い顔をしていると、それを見たセシリアはクスクスと小さく笑っていた。

「次、高いところから落ちる。飛行の時の感覚は、言ってみれば落下する時の感覚に近い。これに近いのとしてはスカイダイビングやパラグライダーなんかもいいな。
ただそれほど自由に動けるわけじゃないから、あくまで擬似的な感覚だし人によってはトラウマになるかもしれん。まあそんな奴はＩＳで飛行なんて出来んがな」

「ふむふむ」

そっか、確かに落ちるって言い方変えれば空を飛んでるとも言えるもんな。
でもあんまりやりたいとは思えないな。

「次、誰か別のＩＳ操縦者、できるなら飛行が自分より上手い奴に抱えられて空を飛ぶこと。自分の意思で飛んでいるわけじゃないけど、感覚的には一番近い」

「ああ、つまり操縦してるのが自分かそうでないかの差ってことか？」

「そういうことだ。まあ今言ったことはコツを掴む方法というか切っ掛けになるだけだ。最終的にはオルコットがが言ったように自分で模索する方がいい」

「なるほど。ありがとう、静和」

「気にするな」

「ちなみに、静和さんはどの方法を試されたのですか？」

「ああ、俺か……俺は二つ目に言った高いところから落ちる、だ。というか落とされた。詳しい説明を受ける前にいきなり」

「そ、それはなんといいますか……」

セシリアが若干引いいてる。いや俺もだけどさ。

「結果的にコツは掴めたから問題ない。それよりも――」

『一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！』

「……呼ばれたぞ。何故か篠ノ之に。あいつに授業内容の決定権なんてないだろうが……」

下を見ると、山田先生からインカムをとった（強奪？）した箒が、怒鳴っていた。

山田先生はおたおたしてる。教師なんだから止めてくださいよ。

しかしＩＳのハイパーセンサーってすごいな。二百メートル下の箒のまつげまではっきりと見ることができる。これは悪用されたら大変だな。

「ちなみに、これでも機能制限がかかってるんでしてよ。」

セシリア曰く元々宇宙空間での稼働を想定しているから、これぐらい普通なんだと。
静和もだけど、セシリアもやっぱり知識面ではすごい。
箒の説明だと擬音やらジェスチャーで説明されるから、正直理解できない。
あんなんでＩＳを動かせるんだろうか。まだ一般生徒、専用機持ちじゃない生徒は訓練機実習の始まってないし、放課後の自主練でもまだＩＳを借りれてないから、箒のレベルが全くわからん。
その点静和の説明はまだわかり易い。専門用語も俺が理解できる範囲でしか使わないし、比較的身近なもので例えてくれるから想像もしやすい。
あとはさっきみたいに、いくつか方法を提示して俺自身に選ばせる形をよく取る。
その方が俺も考えて答えを出すから、理解が早まるんだと。

『織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ。四季はこれに何か追加しろ。内容は任せる』

「了解です。では一夏さん、静和さん、お先に」

そう言って、すぐさまセシリアは地上へ向かって行き、目標の十センチをクリアしていた。

「うまいもんだなぁ」

「代表候補生ならこれぐらい普通だろ。んじゃ、次は俺が行く」

次は静和の番か。追加の指示を受けてたけど、どんなことをするんだ？

◇◇◇

オルコットも行ったし、さっさと終わらせたいし次に行くか。

「うまいもんだなぁ」

「代表候補生ならこれぐらい普通だろ。んじゃ、次は俺が行く」

しかし追加か。……よし、アレにしよう。

俺はまず百メートルほど上昇し、そして一旦停止。

地上に向けて瞬時加速を使用、地表五メートル付近で斜め四十五度方向へ短距離加速、さらに地表十センチで落下ブレーキと真横に向けての短距離加速を同時に行い、地表十センチを滑るように飛び静止した。

やっておいてなんだけど、速すぎて見えてない可能性が高いな。案の定、織斑先生が今の動きを説明してる。

てか今の一瞬の動き、見えたんですか？しかも生身で……

「あれも飛行技術の一つではあるが、実践するにはそれなりの技量が必要だ」

まある程度飛行に慣れれば、これよりは速度を落として似たような軌道は簡単にできるようになる。
地表十センチって制限を抜けば、だけどね。

「さすが、ですわね」

「オルコットもすぐにできるようになるさ。さて、織斑は――」

突如轟音と共に土煙がグランドに舞った。
上を見ると織斑がいない。ということは……

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グランドに穴を開けてどうする」

「……すいません」

織斑だよ。俺のマネをした？
いや、たぶん加速したはいいけど、減速と停止が上手くいかなかったんだな。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

篠ノ之が腕を組み、目尻を釣り上げてなにやら言っている。
昨日教えたって、あの擬音やジェスチャー混じりのやつか？
あんなの教えたと言わん。仮に通じたとしても、初心者にはわかる訳がない。

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「織斑、念のため保健室に行っとけ。あの高さと速度だったし頭からいってるからな」

「そうですわね。念のため保健室で見てもらったほうがいいかもしれませんね」

見た目は大丈夫そうだけど、頭から落ちてるからな。

「……ＩＳを装備していて怪我などするわけがないだろう……」

は？何言ってんだ？ＩＳを装備してたら怪我が無いだって？

「篠ノ之、絶対防御も名前ほど完璧じゃない。衝撃だって完全に消

せてるとは限らない」

「そんなことはあるものか。絶対防御が発動すれば――」

「さっきも言ったように絶対防御も完璧じゃない。ＩＳもだ。何かの誤作動で発動しない可能性だってある。それに俺はＩＳについてはそれなりに知識があるつもりだ。篠ノ之博士の妹だかしらんが、俺よりも知識があるというならそちらの意見も訊く。だけど俺よりも知識がないと思うなら大人しく従え」

「……わかった」

渋々したがってくれる感じだな。かなり不満があるみたいだが。本当に織斑に関係すると反応が変わるなぁ。面倒くせー。

「いや、俺は大丈夫だから」

「お前なぁ……織斑先生」

「…これ以上は時間が惜しい。先に進めるぞ。ただし織斑、体調が変化したらすぐに言え」

「は、はい」

最後のは弟を想う姉の優しさてとこかな。

織斑先生も素直じゃ――

ゴッ！

「――――――っ！」

「失礼なことを考えるな」

「す、すいません」

何故わかった？俺口に出してないぞ？
俺は頭を抑えながら織斑が作ったクレーターから出て指定された位置に立つ。
すぐにオルコットと織斑も同じように並んだ。

「織斑、武装を展開しろ。それぐらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

周りを確認したあと、織斑は突き出した右腕を左手で握って集中し始めた。
その数秒後、右手には白式唯一の武器、雪片弐型が握られていた。

「遅い。この状況下でなら０・五秒で出せるようになれ」

戦闘中ならともかく、今はただ立ってるだけだから余計に厳しいのだろう。

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

オルコットはは例のごとくポーズをとって武装、スターライトｍｋ？を瞬時に展開する。

ただ…さ。その砲口が俺に向いてるのは何故だ？

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめろ。四季を撃つつもりなら止めはせんが」

「あ、いえこれはっ。静和さん、そんなつもりはっ」

「直せ。いいな」

「――、……はい」

無自覚か。

「オルコット、次は近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

スターライトを収納して意識を集中し始めるが、粒子がなかなか安定していない。
おそらく近接用武装は苦手なんだろうな。
まあブルー・ティアーズのメイン武装や運用目的を考えたら必要性は低いからね。

「――ああ、もうっ！インターセプター！」

最終的に半分ヤケクソになって武装名を叫ぶ。
ちなみに武装名を展開の時に言うのは初心者用。
武装名を言うとイメージをしやすいけど、反面実戦では相手に手がわかるからやるなとはいわないけど薦めない。

「……何秒かかっている。次、四季」

「はい」

オルコットが横で悔しそうな顔をしてるけど今は無視。
特に指定もなかったから適当に武器を展開しては収納することにしよう。

アサルトライフル、ショットガン、鎖付き鉄球、浮遊機雷の他にも折畳み式ナイフ、両刃の剣、バズーカなんかも展開してみた。勿論全部０・五秒以内に。
同時に展開したりもした。一応、授業中の俺の役目は、見本でもあるからね。

「現状ここまでできろとはいわん。しかし最低でもこれを目標にしろ」

『……静和さん。苦手な武装はありませんの？』

オルコットからいきなりプライベート・チャンネルで通信がきた。
苦手な武装ね……ないな。

『悪いけどない。初めて扱うものは別だけど、使えば慣れるから関係ないな。』

『す、すごいですわね』

『なあに。ただ器用貧乏なだけさ』

実際そうだ。これはキャリーさんからも言われてる。
苦手意識がないってものあるかもしれないけど、使ってればそのうち慣れて最低でもそれなりに扱えるようになるからね。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑は……念のため保健室にいけ。すまんが四季はグランドを片付けておいてくれ」

「……はい」

なんで俺が。いや、確かに織斑は保健室にさっさと行かせたほうがいいけどさ。

織斑はこっちをみて、「すまん」という仕草をとるが……許さん。あとで何か奢ってもらうか。はあ、面倒くせー。

◇◆◇

グランド整備が終わり、シャワーを浴び着替えをした俺はＩＳ整備室に来ていた。

目的は簪さんに会うため。

「やっ、調子はどう？」

「四季くん。うん、武装はなんとかなりそう。でも……」

「本体部分が、ってことか」

簪さんは顔を顰めながら頷く。

武装が出来ても肝心の本体が形になってないんじゃどうしようもない。

「ちょっとデータを見てもいいかな？」

「う、うん」

了承を得たあと先ずはハードの方を確認する。
本当に基礎フレームが完成しているだけで、その他の部分は全然出来ていない。
設計データを見るとどういう機体にしたいのかは解った。
全距離対応型、となると武装は最低でも三種類か。
まあ武装は後でいい。全距離対応型といってもそれは武装であって、本体の性能はまた別。
打鉄の系統を継ぐ形で防御重視にするか、それとも機動性重視にするか。
短い付き合いだけど、簪さんの情報処理能力が高いことは解った。
ならそれを活かすために、電子戦や情報系の強化をするか……

「あ、あの……どうしたの？なにかおかしかった？」

「あ、ごめん。いやね、本体をどういうタイプにするべきか考えてたんだ」

「それは、全距離対応型で――」

「ああ、それは武装の話ね。俺が言ってるのは本体。つまり武装以外の部分のこと」

「うん。どんなタイプを考えてたの？」

さっき考えてたことを説明。すると簪さんは悩み始めた。
たぶんだけど、どれが一番自分に合うか考えてるんだと思う。

「機動性を重視したタイプが一番無難だけど、簪さんの能力を俺がしらないからなんとも言えないんだ」

「……よ、よかったら、よかったらなんだけど」

「ん？」

「あ、明日、放課後の自主訓練、一緒にしてもらえない、かな……」

明日か。おそらく織斑達は明日も放課後訓練をするだろう。でも、今の段階で俺には声がかかってないし大丈夫か。
それに簪さんの実力を早いうちに知っとかないとこの打鉄弐式の完成も遅れるしな。
ちらっと目を向けると、そこには顔を真っ赤にし不安そうにしている簪さんがいた。
そういえばこの子、人付き合いがあまり得意ではないんだよな。
ん～なんだろう、それ以外の理由がある気もするけど、多分気のせいか。

「うん、明日は大丈夫。じゃあ放課後よろしく」

すると一転、先程までの不安な顔はどこえやら、満面の笑みを浮かべた簪さんがいた。

「うんっ！よろしくお願いしますっ」

「じゃあ今日はもう片付けて終わりにしようか？」

「そうだね」

まだ合って一ヶ月とちょっとだけど、変わったなぁ、簪さん。
初めて合ったころは、まあしょうがないけど、全然話してもらえなかったし俺を避けてるというか、真透（父親）さん以外の男が苦手っぽかったからな。
それが今じゃあ普通に話してくれるし、たまにだけど笑顔も見れる。
変わったなあ……

「ん？」

「どうしたの？」

「ああ、メールかな」

突然携帯が震えたので確認してみるとメールが一通来ていた。
差出人は……楯無さん。

＝＝＝＝＝＝＝

ｆｒｏｍ：更識楯無（たてなしさん）

Ｓｕｂ：（ 。皿 。）

本文：

いいな～、いいな～

簪ちゃんの笑顔が見れて羨ましいな～

私なんて最近全然かまって貰えないのに・・・

覚えてろー、（ 、Д、 ）ノ

＝＝＝＝＝＝＝

「……はっ？」

「え？」

「あ、いや、なんでもない」

「そう……」

え？いや、なんで今の笑顔のこと知ってるの？

あなたこの場に居ないよね？もしかしているの？

それより覚えてろってなんだよ。俺、あなたになんかしたか？

「おーっ。やっぱりここにいたー」

「あ？」

「本音……」

俺が混乱し、簪さんが片付けをしていると本音さんが突如登場した。

「やっぱりここにいたって、何？」

「これからー、織斑くんの代表就任パーティーをするからー、しーくんを迎えにきたのでーす」

「あ、なるほど」

就任パーティーね。なんだろ、嫌な予感がする。

「かんちゃんも来る？」

「え？だって私別のクラスだし……」

「そんなの気にしなーい。たぶん他のクラスの子も来てるから大丈夫だよー」

「ああ、場所は？今片付けしてるし、終わったら行くよ。簪さんは？」

「私は……」

「かんちゃんもおいでよー」

悩んでるな。やっぱ人が多いとこはなるべく行きたくないのかな？あとは”織斑”の就任パーティーだから、ってのもあるかもな。本人の意思とは関係ないけど、自分の専用機の開発が遅れたのはあいつのせいだし、まだ許せれてないんだろうな。

「無理にとはいわないよ。状況をみて無理そうなら帰ってもいいしさ」

「……わかった。行く」

「やったー。それじゃあぱぱっと片付けていこうー」

◇◆◇

あの後三人で片付けを終わらせた俺たちは食堂で開かれる就任パーティーに参加した。

何故かそこにはクラスの人数以上の人がいた。

うん、確実に他クラスの人が混じってる。それどころか上級生の姿

さえあるんだが……
就任パーティーの内容についてはざっとのべよう。

織斑が突然のパーティーに困惑したり
女子と仲良くしている織斑をみた篠ノ之が不機嫌になったり……本当にこいつは織斑が絡むと色々変わるな
オルコットが終始織斑の近くにいたり
俺は簪さん、本音さん、谷本さん、鏡さんと比較的近くにいたり
二年生の黛先輩、新聞部の副部長の人なんだけど、その人からインタビューをうけたり
その内容を目の前で捏造するとか言われたり
俺、簪さん、織斑、オルコットの四人で写真を撮ろうとしたら、結局黛先輩以外全員が写ったり
簪さんと谷本さん、鏡さんが仲良くなったり
色々騒がしかったり

まあこんなとこか。楽しかったけど、疲れた。
ああいう時の女子のエネルギーを舐めていた。普段からじゃ想像しにくいぞ。

そうそう、俺の部屋が決まった。
部屋は１００１室。なんと寮長である織斑先生の部屋の隣。
……どんだけ？いや、まあ何かあったとき便利だからいいけどさ。
ちなみに二人部屋だけど俺しかいない。
普通に考えたら織斑と同室になるんだけど、たぶんまた本社が何かいったんだろう。
ま、同室だと色々面倒なこともあるから、助かるんだけどね。

しかしなんだ。まだ嫌な予感がする。
もしかしてパーティーじゃなかったのか？
んん……そういえば、本社からの資料で中国の代表候補生がＩＳ学園に転入したとか。名前は…あった。
鳳鈴音（ファン・リンイン）。中国の第三世代、甲龍（シェンロン）の操縦者。
小学五年生から中学二年生まで日本で過ごし、その後家庭の事情で中国へ帰国。
ＩＳ適正が高いことが判明。その後僅か一年にも満たない期間で代表候補まで上り詰める。

ふむ、努力もあるけどどちらかと言えば天才型、ってとこか。
そうでもないと一年で代表候補までなるなんてそうそうない。
もしくは甲龍とよっぽど相性が良かったか。
……なんだろう。マジで嫌な予感しかしないんだけど……

「はあ、面倒くさくなりそうだ」

１５話（後書き）

授業風景と簪との会話を書こうとしたら予想以上に長くなってしまった。
楯無のメールに顔文字使ったけど変だったかな？
違和感あったら修正します。

感想・誤字脱字報告お待ちしてます。

１６話（前書き）

最近忙しくて執筆する暇ががが・・・
次回も少し遅くなるかもしれません。
申し訳ないです・・・

今回は少し短め～

16話

「転校生？今の時期に？」

どうも、織斑一夏です。
パーティーの翌日、席に着くなりクラスメイトの一人に声をかけられた。
内容は転校生の噂。
今はまだ四月だけど、最初から入学するんじゃなくて今になっての転校、この場合編入か。
ＩＳ学園の編入・転入の条件は、入学時よりも厳しい。
つまり転校生はそれなりの実力をもっているわけだ。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

代表候補生といえば。

「あら、わたくしや静和さんの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

一組のイギリス代表候補生、今日もポーズをきめているセシリア・オルコット。

昨日のパーティーで知り合った四組の日本代表候補生、更識簪。
そしてアナハイム・エレクトロニクス社企業代表、四季静和。
たしかに代表候補生が二人に代表が一人、中国みたいなデカイ国が代表候補生を送って来てもおかしくないよな。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

あれ、さっき自分の席に座ったはずの箒がなんでそばに？
ああ、箒も女子だし噂には敏感ということか。

「どんなやつなんだろうな」

代表候補生ってことは少なくともセシリア並に強いってことだ。下手したら静和並に。
性格はどうなんだろ？セシリアみたいに気位が高いやつなんだろうか？
そうだったら正直疲れるから勘弁だ。他のクラスだから関係ないといえばそれまでだけど。

「む……気になるのか？」

「ん？ああ、少しは」

「ふん……」

聞かれたことを素直に答えたら、何故か機嫌を悪くされた。
なんか箒とこんなやり取りをすることが最近多い。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス代表戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ」

うん、実戦的訓練を積めるのは、正直助かる。
一般の生徒、この場合専用機を持ってない生徒のことだけど、訓練機を借りるためには最短でも申請してから一日はかかる。
たしかＩＳ学園には三十機ぐらいのＩＳがあるけど、学生数を考えると確実に借りれるわけでもない。
つまり短時間で訓練をするなら専用機持ちとやるのが一番なわけだ。
うちのクラスの場合はセシリアと静和が専用機持ちだけど、静和は放課後どこかに行くことが多いからなかなか合えないんだよな。

そんなことを考えていると周りのクラスメイト達も話しに参加してきた。
どうやらクラス対抗戦は、士気を上げる為優勝商品で学食のデザートフリーパスがあるらしい。
だから皆やる気、というか俺に対する期待がでかいわけだ。

「今のところ専用機持ちは一組と四組だけだから、余裕だよ」

嬉々として騒いでる女子たちの気を削ぐわけにもいかないので、適当に「おう」と相槌をうっておいた。

ん？でも更織さんの専用機って、噂では完成してないんじゃ？どうなんだろう……

「――その情報、古いよ」

教室の入り口から、すげえ聞いたことのあるような声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んあっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

やっと普通の喋り方に戻った。さっきの気取った喋り方は、ちょっと引いたぞ。

「ああ、すまん」

「なによ！？」

ドンッ！鈴が腕を広げて振り返ると、ちょうどそこにはプリントの山を持った静和がいた。
んで鈴の腕が当たったプリントの山は見事に廊下に散った。

「あ……」

「……」

「……」

「……邪魔だ、どけ」

「なあ……！」

しばらく無言でいた二人だが、静和が面倒そうにプリントを拾い始

めた。
しかも鈴に「邪魔」と言ってから。
「何をしている。もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」
「ち、千冬さん……」
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ。四季はプリントを拾ってから入れ」
「す、すみません」
「はい」
すごすごとドアからどく鈴。その態度は１００％千冬姉にビビってる。こいつ、昔から千冬姉苦手だよな。何でか知らんが。
「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」
なんで俺が逃げなきゃいけないんだ。
「さっさと戻れ」
「プリント踏むな、邪魔」

「は、はいっ！」

二組へ向かって猛ダッシュ。千冬姉だけでなく静和もかなり威圧感を出していたので、相当ビビったんじゃないか？
なんていうか、昔と変わらないなあ。でも格好付けるのはどうかと思うな。

「っていうかアイツ、ＩＳ操縦者だったのか。初めて知った」

素直に思ったことをなんとなく口に出した。でもそれがまずかった。

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で――」

箒やセシリアだけでなく、他のクラスメイトからも質問の集中砲火。
ああ、馬鹿……。

「席に着け、馬鹿ども」

すぐさま千冬姉の出席簿が火を噴いた。……これって俺のせい？……俺のせいじゃない……と言い切れない。
はあ、なんでこう色々と起こるんだ？

◇◇◇

まさか千冬さんがＩＳ学園の教師、しかも一組の担任だったなんて。
ビックリするじゃない。
そういえばさっきの男。アイツが噂に聞く二人目のＩＳを操縦できる男か。
お偉いさんたちはなるべく接触するように言ってたけど、んん、第一印象がよくないからちょっと難しいかも。
それに悪いことしちゃったかな。でもアイツがすぐ近くにいるのが悪いんじゃない。

……よし、どっちも悪くない。タイミングが悪かっただけ。そうしよう。

◇◇◇

今日は朝からついてない。
織斑先生に呼ばれて職員室に行ってみたら、プリントの山を教室まで運べという面倒な仕事を言い渡された。
もちろん拒否権なんてないよ？これぐらいのことで、あの人相手に講義してたら時間と命の無駄だ。

んでそのプリントを運んで教室前まで行くと、昨日連絡があった中国の代表候補生がドアの前にいた。
邪魔だから声をかけたら何故か知らないがプリントを飛ばされた。しかも拾うわけでもなくただ立ってるだけ。邪魔だったしＳＨＲの時間も迫ってたからさっさと拾うことに。
途中プリントを踏まれて邪魔され、ＳＨＲに少し遅刻してしまった。理由が理由なので出席簿はくらわずにすんだ。

授業中、特定の生徒。オルコットと篠ノ乃が集中できておらず、何度も織斑先生から出席簿をいただいていた。
何してんだか……

昼休みになってすぐ、織斑にオルコットと篠ノ乃が講義しに行っていたが、基本お前らの責任だろうに。
織斑は二人と数名の女子を連れて、というかオルコットと篠ノ乃以外は勝手について行っているだっけなんだが、食堂へと向かっていった。
俺も何時もの三人組、本音さん、谷本さん、鏡さんと四組に行き、簪さんと合流。
今日は食堂ではなく屋上で食べようということになり、俺を含め弁当を持ってないヤツは購買で買うことにした。

後で聞いた話なんだが、食堂で例の転校生と織斑たちがまたもめていたとか。
俺に被害がなけりゃ問題ないからいいけどな。

◇◆◇

現在放課後、場所は第2アリーナ。
今日は予定通り簪さんの腕前をみるために来ている。
どうやら事前に申請していたらしく、簪さんはラファール・リヴァイブを纏っている。
本音さんはピットでデータ取りの準備中。谷本さん、鏡さんも手伝ってくれてる。

『準備できたよ～』

『了解』

どうやら準備ができたようだ。予想以上に早く準備ができたので少し驚いた。
もしかしたら本音さんは整備とかの方に適正があるのかも。まあ、今はそのことはいい。

「よし。じゃあ、始めよう」

「うん」

まずは飛行適正。次に複数の重火器を使用し射撃適正を確認。次に接近戦限定の模擬戦による格闘適正。最後に模擬戦を行い、総合評価を出す。という流れで行く。
ちなみに重火器は、エイクスに登録されている物をいくつか使った。

学園のラファールに通常登録されている重火器はライフルやショットガンが主で、バズーカやミサイルは別に申請しなければ貸し出しをしていない。
そういう理由でエイクスのを使ったわけ。
データ取りは順調に進み、最後の模擬戦を残すのみとなったわけだが、ここでアリーナの異変に気付いた。
いや、正確にはもっと前に気付いていたんだけど、さすがに無視できなくなった。

その異変というのが観客の数。

どこから広まったのかしらないけど、徐々に、そして確実に観戦している生徒の数が増えてきている。
たぶん俺が原因なんだろう。俺が二人しかいない男の片割れ、そしてこの間の決定戦。
アレが原因で、俺がアリーナで訓練をすると必ず誰か観ていることが多くなった。

「ああ……それじゃあ最後の模擬戦を始めようか？」

「う、うん……」

『合図だすね～。それじゃあー……かいし～』

本音さんの合図を切欠に、俺と簪さんの初の模擬戦は始まった。

１６話（後書き）

鈴登場するも扱いが微妙～

感想・誤字脱字報告お待ちしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5082u/

器用貧乏ですむのか？

2011年9月2日10時19分発行